
令和元年度共通教育 活動報告書

I 「共通教育実施委員会」活動の総括	1 ^P
II カリキュラム等編成部会	4
III 自己点検・自己評価部会	5
IV FD部会	5
V 広報部会	6
VI 分科会報告	
1 大学基礎論分科会	8
2 課題探求実践セミナー分科会	13
3 学問基礎論分科会	15
4 人文分野分科会	30
5 社会分野分科会	33
6 生命・医療分科会	36
7 自然分野分科会	40
8 外国語分科会	42
9 キャリア形成支援科目分科会	43
10 スポーツ・健康分科会	44
11 日本語・日本事情分科会	52

I 令和元年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2020年3月25日

共通教育実施委員会

1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度は、第1回実施委員会(令和元年5月28日開催)において、以下の4項目を重点事項として掲げた。

- 学部ごと、および分野ごとの令和2年度の共通教育授業の担当体制は、今年度(令和元年度)の基本案を基準とし、各学部で定めている共通教育に関わるカリキュラム・ポリシー、今年度の開講状況および受講状況、分野ごとのバランスや各学部所属教員の専門分野の構成、等を考慮して決定する。
- 「公正な成績評価の実施に向けて(申し合わせ)」および「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていることを担保するための体制の構築」(平成30年3月19日、学士課程運営委員会決定)に従って、共通教育における質保証体制を整備する。
- 共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みを行う。
- 次年度(令和2年度)本学が当番校となる中国四国地区大学教育研究会の準備作業を通じて委員会活動の活性化を図る。

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

令和2年度担当体制の検討に際しては、上記の方針どおり、平成30年度以後の学部人事ポイント変化を、基本人数・コマ数に乗じることによって、基本数(開講コマ数)を決定した。その結果、独自にカリキュラムが運営されている医学部を別にすると、人文社会科学部(-5)、教育学部(-4)、および理工学部(-1)では昨年度に比べて減、農林海洋科学部と地域協働学部では学部で同数、となった(全体では10コマ減)。この結果に従い、令和2年度カリキュラムはほぼ順調に編成することができた(詳細については、以下のカリキュラム等編成部会および各分科会の報告を参照)。

共通教育における質保証、および教養科目カリキュラムの点検と改善については、各分科会長と主管および自己点検・自己評価部会長との意見交換を通じて行った。具体的には、各分科会所管の開講科目について、受講者数および成績分布データの分析、非常勤講師が担当する授業の点検等を含め、カリキュラム全般について意見交換を行うことができた。これは昨年度に引き続いて実施した成果と言えるが、今後もこの活動を継続していく必要がある。

中国四国地区大学教育研究会の準備については、令和元年12月より2回の準備会を開催し、準備を進めつつある。今回の研究会では、「教養科目再考」をテーマとして予定しており、本学共通教育カリキュラム改善の機会としていく予定である。ただし、新型コロナウイルス問題のため、開催するかどうかは3月末に次期主管および次期教育担当理事と協議の上、学内での方針を決定することとしている。

以上のほか、長く共通教育の課題となっていた担当体制について、主管、常任会議、実施委員会として検討をすすめた。年度末時点での検討案は、次年度に引き継がれ、検討されることとなった。

2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の4 部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する(詳細は各部会の報告を参照)。

カリキュラム等編成部会では、次年度に向けたカリキュラム編成は、3回の部会開催を通じて、全体的にほぼ順調に進めることができた。また、面談を通じた各分科会長との意見交換も奏功し、共通教育担当体制に係る基本方針に沿った授業題目表を作成することができた。

自己点検・自己評価部会では、部会長(今年度は主管が兼務)およびカリキュラム等編成部会長が各分科会長と、成績分布やカリキュラムの問題点について面談による意見交換を行った。この他、授業アンケートによる授業改善活動を行った。ただし、授業アンケートに関しては、第5週・15週アンケート(授業改善アクションプラン)や最終回に行う授業アンケートから、eポートフォリオ上でのアンケート(reflective monitoring)に切り替えて実施した。このことにより、教員目線のアンケートから受講者目線のアンケートとなるとともに、コスト削減も進めることができた。ただし、このアンケート結果は本人にしか返されないシステムになっているため、第三者による分析ができない状態となっている。

FD部会では、部会として独自のFD活動はできなかったが、令和2年度に本学で開催予定の中国四国地区大学教育研究会の準備も念頭に、共通教育実施委員会から6名(近藤主管、大櫛、佐々、今井、大塚、野田 の各委員)が、令和元年6月8～9日に山口大学で開催された第67回同大会に参加し、大会開催のための情報収集等をおこなった。

広報部会では、『パイプライン』第54号を12月に発行、第55号を3月に発行(予定)した。電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。報告書の中では「パイプライン」編集内容のブラッシュアップが今後の課題として指摘されている。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組みについては、分科会ごとの個別の報告に譲るが、特筆すべき点としては、以下の点が挙げられる。

・「大学英語入門」と「英会話」を共に1年を通して4技能バランス良く学べるようにするため、現在実施している週2回授業(2単位)を週1回授業(1単位)、前後期で2単位履修させる方策を議論した。

(2) 自己点検評価のおもな取り組みは、以下の通りであった。

今年度は、昨年度に引き続き、各分科会で開講している科目について、受講者数、成績分布等について点検を行い、分科会長と主管、カリキュラム等編成部会長との面談を通じて検討した。これ以外の、各分科会におけるおもな取り組みは、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で、担当教員間での話し合いや情報交換、授業アンケートの

分析が行われた。農林海洋科学部のアンケートでは、アカデミック・ライティング(入門編)の評価が高かったことから、次年度も実施することにした。地域協働学部では、第5週目・15週目アンケートが実施され、学部ごとに分析がなされた。

学問基礎論分科会では、本年度も昨年度に引き続き、学外からもアクセスできるmoodleを活用して授業アンケートを実施した(2020年1月7日～31日)。この結果は学部ごとに詳細に分析されており、今後の授業改善に役立つことが期待される。

課題探求実践セミナー分科会では、16科目(回答者合計891名)について、授業アンケートが実施された。分析の結果、肯定的評価が84%に達しており、高い評価が得られていることが分かった。

人文分野分科会では、成績分布の検討結果についての分析が行われた。

外国語分科会では、令和元年度第1学期の成績評価を分析し、英語、ドイツ語、中国語の担当責任者間で結果を共有したうえで、対応がなされた。

スポーツ・健康分科会では、1学期には5科目、2学期には9科目で授業評価アンケートが実施された。報告された結果のうち、「卓球の評価が目立って低いのは、狭い卓球場に32名の履修希望が殺到し、ラケットの数も足りないままで実施せざるを得ない状況が招いた結果と思われる」との指摘は注意すべきである。さらに、アンケート結果は、平成26年度以後のデータとともに詳細な分析が行われ、多くの観点で、年度ごとに評価が高くなっている傾向が確認された。

(3)各分科会でのおもなFD活動の取り組みは、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、人文社会科学部および教育学部においてFDが実施された。医学部ではチューター研修会が開催された。また、他の学部でも、授業改善のための何らかの活動が行われている。

人文分野分科会では、大学における教育の質保証に関するFDについての聞き取り調査、成績評価の基本情報の確認、現状の分析と意見交換、この結果を踏まえたFD研修会(成績評価について、昨年度以降の推移の共有および意見交換)が行われた。

スポーツ・健康分科会および生命・医療分科会では、「ミックススポーツ」について授業参観と実施教員による意見交換が実施された。「ミックススポーツ」は平成30年度に新規開講となった科目であり、今年度で2年目となるが、「学生の履修決定までの動向は昨年と同様に問題なく推移した」、また、ミックススポーツは、「オムニバス形式の運動実技授業により、学生が多くの運動に触れることができることが利点であり、なかなか体験できない種目を行うことができた点は、生涯スポーツや将来の健康づくりに繋がる可能性を感じるものであった。」ことなどが報告された。また、4クラスの「健康」についても、授業評価アンケートが実施され、分析が行われた。注意すべき記述として、以下を引用しておく。——自由記載の中に心の健康に関するものが6件あった。「大学に入ったばかりでいろいろと不安だったりストレスがあったけど…」や、「自分はメンタルが弱い方なので…」という記載があり、本授業が学生の心の負担を軽くし、前向きに学生生活を過ごすことにも影響していた。「自分の生き方やモチベーションを上げてくれるような授業を増やしてほしい」という要望が1件あり、今後学生の状況に即した内容の検討が必要かもしれない。——

以上のほか、第56回国立大学教養教育実施組織会議・同事務協議会(大分大学で開催)に主管が学務部長と共に参加した。

4. その他

- (1) 『令和元年度共通教育実施委員会活動報告書』は4月中に発刊し、WEB上で公開する。
- (2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

II カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 有川 幹彦

1. カリキュラム等編成活動の経過

2019年7月2日 第1回カリキュラム等編成部会

共通教育授業担当体制の決定方法について説明を行った後、令和2年度共通教育に係る担当体制を提案し、これが了承された。また、令和元年度のカリキュラム等編成部会スケジュールを確認した。

2019年10月2日 第2回カリキュラム等編成部会

令和2年度共通教育授業担当体制が了承された。これを受けて、各分科会長に対して、令和2年度共通教育授業題目表の作成を依頼した。また、機構・センター等所属の教員に対して、令和2年度共通教育の授業担当の協力を依頼した。

2020年1月21日 第3回カリキュラム等編成部会

令和2年度の共通教育授業題目表を確定させた。また、機構・センター等所属教員による新規科目の確認を行った。

2. 令和元年度カリキュラム等編成活動の総括

次年度に向けたカリキュラム編成は、全体的にほぼ順調に進めることができた。また、面談を通じた各分科会長との意見交換も奏功し、共通教育担当体制に係る基本方針に沿った授業題目表を作成することができた。しかしながら、「外国語」や「日本語」においては、その授業実施について継続審議となっており、速やかな、且つ学生に不利益のない形での決着が望まれる。加えて、共通教育科目ナンバリングを参考に、今後、学問分野間での偏りを無くす努力も必要である。

Ⅲ 自己点検・自己評価部会

部会長(代理)
共通教育主管 近藤康生

令和元年度活動の概要

自己点検・自己評価部会では、本年度の活動方針として、以下の2点の目標を掲げた。

- 共通教育における内部質保証体制を整備するため、分科会ごとに授業の履修状況、成績分布の分析結果を総括する。
- eポートフォリオ上の授業アンケート機能を活用して、授業改善を促す。

自己点検・自己評価部会では、昨年度に引き続き、部会長(今年度は主管が兼務)およびカリキュラム等編成部会長が各分科会長と、成績分布やカリキュラムの問題点について面談による意見交換を行った。

授業アンケートに関しては、今年度から、第5週・15週アンケートから、eポートフォリオ上でのアンケート(reflective monitoring)に切り替えて依頼したが、このアンケート結果は授業担当者にしか返されないシステムになっているため、第三者による分析ができない状態となっている。このため、共通教育全体として、授業改善の検証は行えなくなっているのは、課題として残る。

しかし、新しいアンケート(reflective monitoring)の質問項目では、学生が自分自身の学びを振り返ることを主眼に置いたものとなっており、教員の教育力向上だけでなく、学生自身の学びを深めることを重視するという近年の流れに沿ったものとなっていることから、アンケート処理にかかる人的および経済的なコストを削減できたこととともに、教育的にも改善が進んだとは言える。

Ⅳ FD部会

部会として独自のFD活動はできなかったが、大学基礎論、学問基礎論、人文、社会、生命・医療、外国語、キャリア形成、スポーツ・健康、日本語・日本事情の各分科会でFD活動がおこなわれた。

令和2年度に本学で開催予定の中国四国地区大学教育研究会の準備も念頭に、共通教育実施委員会から6名(近藤主管、大櫛、佐々、今井、大塚、野田)の各委員)が、令和元年6月8~9日に山口大学で開催された第67回同大会に参加し、大会開催のための情報収集等をおこなった。

V 広報部会

部会長 山崎聡

1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

今井典子（人文学部） 三宅尚（理学部） 森木妙子（医学部） 松本美香（農学部）

鈴木啓之（地域協働学部） 前西繁成（TSP）

2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年 2 回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第 54 号を 12 月に発行、第 55 号を 3 月に発行（予定）した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

- ・第 1 回部会（メール会議：令和 1 年 8 月 7 日）：議題 1 『パイプライン』第 54 号発刊計画および令和 1 年度活動計画について
- ・パイプライン発行にあたって、54 号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。
- ・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。
- ・特集は、ローテーションにより、分科会「キャリア支援」「スポーツ・健康」とした。

- ・第 2 回部会（メール会議：令和 1 年 12 月 6 日）：議題 1 『パイプライン』第 55 号発刊計画について

- ・パイプライン発行にあたって、55 号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

- ・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。
- ・今年度も昨年度に引き続いて、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS、Facebook および学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第 54 号を令和 1 年 12 月に HP に掲載した。
特集は分科会で、「キャリア支援」「スポーツ・健康」であった。
教養の頁は、ローテーションに基づき、教育部担当であった。
- FD 部会報告
共通教育実施機構委員会から
- ・第 55 号の編集を行った（発行は 3 月の予定）。
- ・特集は、「教養科目」であった。教養科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等
- ・学生記者(各学部 7 名 計 14 名)：原稿 400 字程度。原稿料 1500 円（支払書類要）、院生も可。※原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。
- ・教員(7 名)：各学部 1 名 原稿 800 字程度

4 次年度（以降）の課題

- ・昨年からの継続課題であるが、共通専門科目が廃止されたことに伴い、特集のローテーション 1 ターン分抜け落ちたので、変化に乏しく、やや平板となる懸念が生じている。この点を鑑みると、編集方針を再考するべき時期に来ているように思われる。
- ・今年度は、55 号編集時に若干のトラブルが生じた。特集は「教養科目」であったが、一部で取り違えがあり、「初年次科目」原稿が提出されるという事態が生じた。このため、改訂に 1 か月弱を要し、その分、刊行が遅れる顛末となった。もちろん、人為的なミスではあるが、上記のように、編集パターンが乏しくなったことによる影響も考えられる。引き続いて、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。
- ・広報の手段として、今年度は大学の Facebook も新たに活用された。その分、幾らかでもアクセス数増加を期待したいが、更なる方法についても検討してゆきたい。新入生オリエンテーションの際に何らかのアナウンスができれば良いと思われる。例えば、アドレスを記載したパンフレットを配布するなど（驚いたことに、学生に原稿執筆を依頼した際、学生側から「パイプラインって何ですか？」と聞かれるような有様）。
- ・共通教育のあり方自体も再考する時期に来ており、カリキュラムの編成方法も抜本的な改革が望まれている昨今である。それに伴い、『パイプライン』の編集内容もブラッシュアップしていくべきだと思われる。

VI 分科会報告

1. 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 大石達良

1. 2019年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらう演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部任され、実施されている。2019年度に実施された各学部のカリキュラムの内容は以下の通りである。

人文社会科学部

人文科学コース：基本的に前年度の内容を踏襲した。大教室に全員を集め、前半は、大学の学びや各分野の紹介などをテーマとする教員による講義とした。後半はグループディスカッションとし、前半で聞いた講義内容について確認してもらった。授業を通して、人の発言を正確に聞くことと、それを他者と共有することの重要性を学び、かつ大学での学びと、本コースで学べる学問の概要を理解した。

国際社会コース：前半は学生生活を送る上での基本的な情報、大学での学びのための初歩的なスキルについて講義を行った。後半は、少人数のクラスに分かれて1年生のレベルに適した専門的内容の本を講読し、レジユメの作成や発表、議論、レポートを作成するという演習形式の授業を行った。

社会科学コース：前半に一度、大教室において、全員にキャリア形成の講義を受けさせた。それ以外は例年通り、10名の教員がローテーション型で、本を読むことを中心とした演習形式の授業を行った。

教育学部

本講義は、本課程の基幹となっている実習系授業の基礎講座として位置づけ、教員養成の基礎となる内容の講義を実施した。「授業科目の主題」を、(1) 教師をめざすモチベーションを持てるようにする、(2) 教師に求められる能力の基礎を理解する、(3) 地域と教育学部のかかわりを理解する、(4) グループ・ワークのスタイルを身につける、と設定している。外部講師による基礎講座に加えて、課題探求実践セミナーの内容と連動した実習を含めて実施しており、これまで受け身的に学ぶことが多かった学生に、子供理解など教師になる上で身につけなければならないさまざまな課題について、積極的に考え行動していく機会を与えたと考えられる。

理工学部

今年度は、まず学生総合支援センターの森田佐知子先生による「キャリアデザイン入門」の講義を行い、学生の将来についての意識づけを行った後、学部長による理工学部で学ぶことの意義についての講義、学外講師による講演3回、副学部長、学科長の4名による4年間を有意

義に過ごすためについての講演を実施した。

各講演の翌週には毎回、6クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。また、残りの講義回ではこれまでの講義内容を踏まえ、グループごとにプレゼン資料を作成し、発表を行い、学生間で相互に評価をした。

講義2回目に行うアドバイザー教員との面談では、アドバイザー教員制度や教員との連絡の取り方の説明とともに、アドバイザー教員が履修・日常生活についての相談を担うことの周知、レポート等における剽窃・盗用に関する注意喚起を通じた早期の倫理教育、英語力の確認・強化をはかるためのTOEIC受験の推奨が行なわれた。また、前半8回の授業のうち4回以上欠席した学生に対して、アドバイザー教員による面談を再度実施した。

医学部

専門職教育の色合いが濃い医学部では、よき医療人を養成する目的に沿ったテーマに改編するとともに、医学科・看護学科が併設されているメリットを活かし、合同授業として実施している。テーマは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナルリズム」である。授業形態は、各テーマについて「講義 → グループ討論 → 発表」を3クール繰り返した。グループ討論ではクラスを20グループに分けてチューターが指導に当たった。グループ発表は5グループずつ4教室に分かれて実施し、それぞれ1人の教員が担当して授業の運営と評価を行った。最終日には本学を卒業した若手医療従事者2名と学生との対話を行った後、期末試験として最終レポートをまとめさせた。

農林海洋科学部

農林海洋科学部では、新たに第1講にアカデミックライティング（入門編）を組入れ、まず昨年と同様に3つの基本講義（学部長による「大学とは何か どんどころか／農林海洋科学とはどんな学問か」、学務委員長による「大学でなにを学ぶのか?」、学部教員による「地方大学としてあるべき高知大学」）を受講後、関連テーマを5～6名の班毎に設定し、3グループ計36班に分かれて1回目のグループワーク（5～7講、テーマに即した情報収集・整理、プレゼン資料の準備、報告と相互評価）に取り組んだ。相互評価結果については、グループ毎に担当教員がとりまとめ全員にフィードバックした。なお、第2・3講は物部キャンパスで開講し、第3講にはアドバイザー教員との面談の時間も組入れた。

8～12講では本学部を特色づける主要分野・フィールドに関する話題を「農林海洋科学の基本I～V」として提供し、班毎にテーマを設定して2回目のグループワーク（13～15講）に取り組んだ。全体を通して、講義レポート提出やプレゼン資料作成等における不正・不適切行為への注意喚起や、グループワークにおける義務・責任感の醸成に努めた。

地域協働学部

地域協働学部の大学基礎論は、これからの学びと卒業後のイメージを広げるために、高校までの学習とは全く異なる大学での学びを見据えて、次の三つの達成目標が設定された。

1. 大学で学ぶことの意義と目的を考える。
2. 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。

3. 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これらの目標を達成するために、大学基礎論では、学部のカリキュラムを念頭においた四つの人材像に対応しうる方を外部講師（合計4名）として招き、レクチャーおよび事前学習、振り返りを通して、大学4年間の学びの在り方や地域を取り巻く情勢についての知見を得た。また、4月初旬に合宿を行うことで、学生間および専任教員と学生における密接な人間関係の構築を目指すとともに、学びの目標とアクションプランを立てた。

土佐さきがけ

受講生は、グリーンサイエンス人材育成コース、国際人材育成コースの2コースに属する10名で、大学幹部による講義と2回のグループワークとプレゼンテーションを行った。授業目標は、(A) 他者から教わるだけでなく、自身が学びとる姿勢への転換を図ること、(B) 土佐さきがけプログラムの特色と意義、社会が求める力と社会における高知大学の役割と意義を理解すること、(C) グループワークを通じて相手の話をよく聞き理解して、自分の考えを分かりやすく伝える双方向のコミュニケーション力とプレゼンテーション力を向上させる、の3点である。それぞれの講義のテーマは、「大学で学ぶとは（倫理教育を含む）」「地方創生に向けた高知大学の挑戦」、「あなたも国際人になれる」、「私の研究について」である。2回のグループワークでは、「大学での学びのまとめ」と「高知の活性化について」をテーマとした。グループ毎に課題探求の対象を論議し、各々が探求し考察した成果をプレゼンテーションすると共に、全員による質疑応答と相互評価を行った。昨年に続き今年も、キャリア教育に関する講義を2コマ実施し、自らの個人目標をレポートとして作成した。

2. 自己点検評価活動について

各学部における自己点検・評価活動については以下のとおりである。

人文社会科学部

3コース間で内容が異なるが、3コースともに担当者間での自己点検評価活動が行われている。人文科学コースでは、講演者・ディスカッションリーダーなど授業を担当した教員が授業の概要、学生の取り組み具合、問題点や今後の反省点、などについての報告書を作成し、後述のFDの材料とした。

社会科学コース、国際社会コースでは、15回目に学生に授業アンケートを実施した。

教育学部

昨年同様に、学生へのアンケートによる授業内容の意見聴取を実施した。

また、以下のFD活動にも述べるが、授業終了後アドバイザー教員13人全員を集めて授業内容や課題、学生のレポートによる達成度等について意見交換会を行い、報告書にまとめた。

理工学部

昨年と同様に、学生との動向を把握するために、アドバイザー教員との面談を講義2回目に実施し、昨年同様に出席状況をKULASに入力し、出席状況を共有することにより欠席者への指導を丹念に行った。また、前半8回の授業のうち4回以上欠席した学生に対しては、アドバ

イザール教員による面談を再度実施した。そして第 15 週目に授業評価アンケートを行った。平成 31 年 1 月 7 日に開催された理工学部・理学部内部質保証委員会において、授業評価アンケートに基づいて点検が行われ、次年度に向けての改善点等が検討された。

医学部

プロフェッショナルリズムについて考えさせるテーマで使用するトリガービデオの内容を、終末期医療で問題になっている「胃瘻」を中止すべきかどうか考えさせるテーマに変更し、看護学科の学生も同じ医療人として社会的・倫理的な問題に取り組ませることができた。

大学基礎論自己分析アンケートの集計結果ならびに授業評価アンケートの結果から、本授業は学生からの評価が高いため、現在のやり方を踏襲して良いと考えている。

農林海洋科学部

授業評価アンケートを実施し、アカデミックライティング（入門編）については高い評価が得られたことから、次年度も実施することとした。

地域協働学部

5 週目アンケートを経て授業改善アクションプランを提示し、授業改善をおこなった。15 週目アンケートによると、満足度を含めて 1 から 6 すべての設問で 80%を超えており、到達目標については 1 が 84%、2 が 87%、3 が 76%であった。学生のコメントでは「経験談を聞くことで自分の大学生活をより良いものにできる」「自分の学びを深められる機会になった」など、到達目標に関連する記述が多くあり、成績分布は、秀が 5%、優が 68%、良が 21%、不可が 6%であった。学生の自己評価およびコメント、今期の成績から、本授業で掲げている三つの達成目標をある程度クリアさせることができたといえる。

土佐さきがけ

授業の進行並びにカリキュラム全体の進行と調整は、国際人材育成コースの前西を中心として各コース教員が協力して行うことができた。グループワークにおいては、昨年度把握された課題に基づき、進め方の改善を行った。また 1 回目のグループワーク終了時に、e-ポートフォリオの機能を活用し、アンケート調査を実施した。他人の意見を聞けるようになっているが、自分の意見を十分に発言できない学生がいたため、2 回目のグループワークの初めに学生に伝え、改善を図った。

3. FD 活動等について

学部における FD 活動については以下のとおりである。

人文社会科学部

3 コース間で内容が異なるが、3 コースともに担当者間での FD 活動が行われている。

人文科学コースでは、11 月のコース会議前に、コース構成員全員で FD を実施し、本年度の課題を検証するとともに、それを踏まえた次年度の計画を策定した。

国際社会コースでは、FD ミーティングの中で、大学基礎論に関する課題の検討がなされて

いる。今年度は特に、修学に困難を抱える学生について話し合われた。また、大学基礎論および学問基礎論全体の授業構成についても検討を加え、検討内容を来年度の授業構成に反映した。

社会科学コースでは、8回目と15回目の終了時に担当者FDを開催し、授業内容、授業方法等について話し合われている。

教育学部

授業開始前の3月に、担当教員によるFD会議を開催し、本年度の授業計画に関する確認及び修正、仕事分担の確認等を行った。さらに、全授業終了後8月8日に、教員によるFD会議を再度開催し、今年度の成果と課題、来年度への展望を検討した。学生アンケートや教員の意見からは、教員になることを目指している学生にその基礎知識を学ばせるという目的は十分に達成できたと考えられる。一方、大学や学問の位置づけ、高知大学の存在意義、議論や合意形成の手法の習得、さらに成績評価にも繋がるレポートの書き方への指導については手薄感があるとした。

理工学部

演習クラスにより担当教員が異なるだけでなく、同じ演習クラスでも複数の教員が担当していることから、大学基礎論の取りまとめを行なっている福間学務委員長を中心に各担当教員間の意思疎通をはかり、スムーズかつクラス間で差が生じないよう公平な授業運営を心がけた。

医学部

5月8日（水）と14日（火）の18:00～19:00まで大学基礎論チューター研修会を開催し、担当チューターのファシリテーション力向上を促した。また、授業評価アンケートの自由記載欄に目を通し、授業計画の改善策を検討した。コメンテーターに対するFDは実施できなかった。

農林海洋科学部

担当教員で積極的に意見交換を行った。また、講義内容を充実させるために、講義改善策の提案、改善意識の向上を図った。また、9月と3月に本年度の授業の振り返りを行い、来年度の実施へ向けて交代する担当者との引き継ぎと改善点を協議した

地域協働学部

毎回の授業において地域協働学部教員（複数名）によるピア・レビュー／授業参観を実施するとともに、授業改善アンケートをもとにした授業に関する分析と教育効果の検証を随時確認してきた。本学部は新設学部であるために、授業計画も内容も時間をかけて試行錯誤し、授業をさらに良くしていく必要がある。

土佐さきがけ

カリキュラムの内容は、授業前の運営委員会で全員の確認を得て進めた。昨年よりキャリア教育を2コマ実施し、学生の進路目標をより明確に設定させている。また、2回の授業を公開したことにより、他の視点からの意見を聞くことができた。

2. 課題探求実践セミナー分科会長

藤岡正樹（地域協働学部）

—カリキュラム編成活動—

1. 令和2年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部に依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

<令和2年度開講授業題目>

人文社会科学部開講セミナー 7 題目、教育学部開講セミナー 1 題目

理工学部開講セミナー 3 題目、医学部開講セミナー 2 題目

農林海洋科学部開講セミナー 1 題目、地域協働学部開講セミナー 1 題目

自由探求学習 2 題目、地域防災入門 1 題目、学びを創る 1 題目

国際協力入門 1 題目（※定員は授業ごとで異なる）

2. 令和2年度への課題

本年度に引き続き、全クラス総定員では全学生の受入は可能とはなっているが、すべての学部で定員を満たしているわけではなく、履修上の自由度が低くなる可能性がある。これら課題を解決するためには、学部・学科定員に関する総合的な再検討が必要となる。共通教育授業の担当体制の改定が議論されているため、今後は、担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成の改革に期待する。

—自己点検・評価活動—

副分科会長 杉田 郁代（大学教育創造センター）

図1、図2に、令和元年度に開講された課題探求実践セミナーの中から授業評価（アンケート）の回答の得られた16 題目（回答者合計 891 名）について評価分類毎の集計結果を示す。

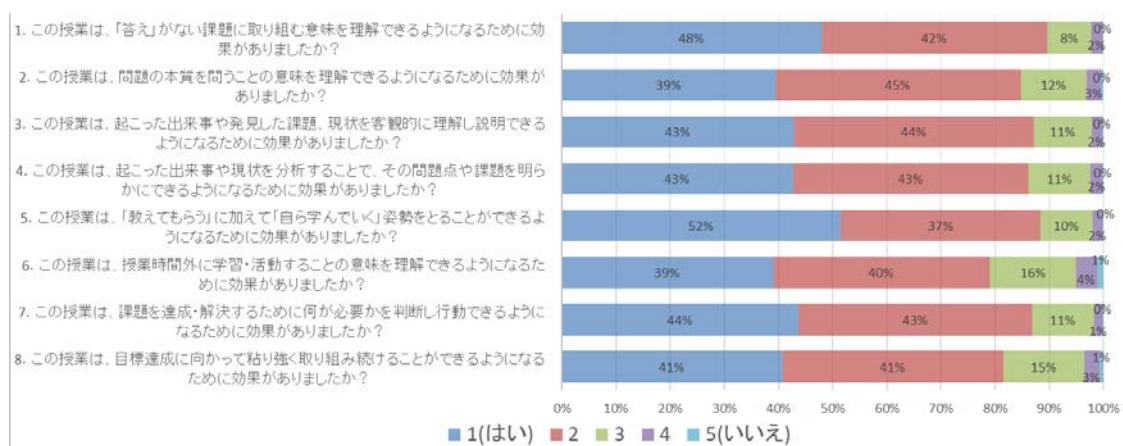


図1. 課題探求・問題解決力

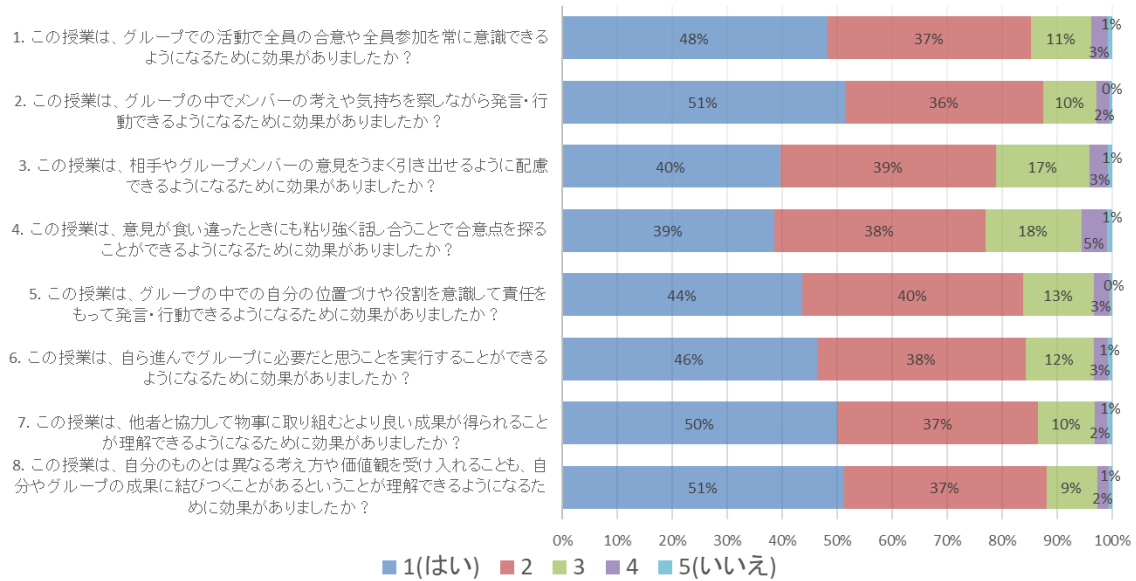


図2. 協働実践力

評価が高い（1もしくは2）と回答している割合が「課題探求・問題解決力」で、平均約85%、「協働実践力」で平均約84%であり、また、項目ごとの大きなばらつきもなく、全ての項目において、75%を超えていることから、両評価分類ともに高い評価が得られているといえる。

3. 学問基礎論分科会報告

学問基礎論分科会長 伊藤 桂

学問基礎論のカリキュラムとアンケートを用いた自己評価の結果について、以下に①カリキュラム、②各学部の分析、③全体総括を行う。

1. カリキュラム

人文社会科学部

人文社会科学部では、①「哲学・思想入門」「心理学入門」「日本史入門」「外国史入門」「地理学入門」「日本語学入門」「日本文学入門」「英米文学・英語入門」、②ミニ・ゼミナールを通じて、文献を読み、レジュメを作成し、発表・議論し、レポートを作成するという大学での基本スキル、③「なぜ人は動かされてしまうのか」の原理を理解し、実際の企業の行動や自身の体験などに当てはめて、思考する幅を広げる、④多文化社会を考える、④経済学的思考、⑤基本判例を抑えつつ、公務員試験過去問を解く、⑥ゲーム理論やマイクロ経済学の入門的なトピックを理解する。また、簡易なモデルを用いて現実を描写する、⑦身近な水産物（エビ）を通じて、先進国と途上国の関わりを考える、⑧政治分析の入門、⑨「食」（ものを食べること）をとおして社会をみつめる。「食」を通して国際情勢を考える、⑩企業や組織について経済学の観点から理解する。学んだ経済学的な考え方をを用いて実際の企業や組織における様々な事柄を説明できるようにする」など、多彩な内容で学問基礎論を実施した。

教育学部

①学問の魅力、学ぶ意義を明らかにし、学びの展望を構築する、②講義とグループワークを通じて、聞く力、読む力、思考力、表現力などを養う、③演習形式で少子化社会・格差社会のもとでの教育問題を考える、④「子どもの学習過程の発達」、「今、求められる国語科授業づくり」、「音」が「音楽」になる時、「マスメディアの発達による個人の音楽聴取方法」、「共に生きる海洋生物の研究と海洋教育」、「特別支援教育の学問的基礎」など、学問の意義を確認しつつ、具体例にもとづいた分析により、学生の思考力の向上に務めた。各クラスで課題を設定し、講義とグループワークを通じて、聞く力、読む力、思考力、表現力などを養ったほか、アカデミック・ライティングについて学んだ。

理工学部

数学コース

- ・数列の収束など解析学における極限の概念に関連する課題
- ・データの処理や推定量の挙動の検討などの統計学に関連する課題
- ・多面体や曲面などの幾何学に関連する課題
- ・微分方程式、フーリエ解析、微分幾何のいずれかに関連する課題

などの課題演習を通じて学生の基礎学力を養成した。

物理科学コース

素粒子・原子核物理学、宇宙線・電磁物理学、物性物理学、物性化学で必要となる基礎的概念などについて解説を行ったあと、グループ学習による質疑応答を通じて、学生に理解を深めさせた。

コンピュータ科学分野

2進数、機械語、論理回路、Webシステム、ユーザインタフェースをキーワードとして、

コンピュータのハードウェアの仕組み、情報システムの役割、インタフェースデザインのあり方について学生の理解力を高めるための演習を行い、情報システムの仕組みについて習得させた。

生物科学分野

植物分類学、海洋生物学、植物生態学、理論生物学、古生物学、比較生化学、動物生理学、細胞生物学などに関する話題提供と演習を通じて、高校で学んだ生物学を基礎として、理解力を鍛える指導を行った。専門的な学術知識と理解力を深めるための指導を行った。

化学・生命理工学分野

①構造生物学、タンパク質結晶学、生理活性物質と生体高分子の相互作用研究、②分析化学、環境モニタリング、機器分析に関する内容、③糖鎖工学、タンパク質工学、ケミカルバイオロジーに関する内容、④無機化学、錯体化学、材料化学に関する内容、⑤有機化学、光化学、超分子化学、材料化学に関する内容などの専門領域について各教員の講義を実施し、初年次からの意識づけや、研究に関する興味や関心を持たせる指導を行った。

地球防災環境科学分野

地球表層環境、地球史、自然災害メカニズム、減災・防災技術をキーワードとして、災害に強いまちづくり、山地から沿岸地域の土砂の移動、施設や建築物の安全性、震源破壊過程と地震動、堆積層の形成と変形、地震に伴う地殻変動や電磁気現象、災害をもたらす気象、岩石学・鉱物学分野の概要、掘削科学の利点と広域地質との連携など、学問分野の概要や最近のトピックスを紹介した講義を実施し、グループ学習によって学問分野の方法論や表現方法の理解力を高める指導を行った。

農林海洋科学部

①農学、農林業、食糧生産、自然環境、地域農業、②生命科学の諸現象の解明、および環境保全に向けた循環型の生物資源生産、③高知県における生物資源の利用と保全の現状、高知県と海洋(特に水産)分野との係わり合い、海底資源環境・海洋生命科学に関する内容、などについて教員からの話題提供を受けたあと、グループ学習で課題を設定し、議論を通じてその解決法を考えさせる指導を行った。また、アカデミック・ライティングの基礎学習を行った。

地域協働学部

地域社会を理解し協働活動を行うための基礎となるコミュニケーション力、共感力、関係性理解力、情報収集力、状況判断力、読解力を身につけることを目標として、実践的なトレーニングを通じてその能力の向上に向けた指導を行った。様々な課題に関する講義を聴き、グループワーク等を通じてその内容に対する理解を深める作業を行い、多面的なものの見方を理解させることを目指した。

土佐さがけプログラム

化学・生命理工学という広い学問分野を知るための一般的知識の醸成を目指してグループワークによる授業を実施し、レポート・論文作成法・調査法の指導を通じて、今後、大学で学びかつ社会へ出た際に必要となる知識・考え方・心構えなどを各教員が培ってきた知識や経験、哲学を元に修得させた。また、生命・環境人材育成コースの学生に対しては、与えられた課題に対して、自ら調べて理解し、考察することによって、学習力、考察力、伝達力を身につけるための指導を行った。

医学部

人間の行動を科学的に理解し、健康の維持、増進のための視点を学習することをテーマとして、脳の働きと基本構造、記憶の仕組み、学習の仕組み、感情の仕組み、慢性疾患患者の行動変容、禁煙の行動変容、疫学の知識を応用した行動変容の仕組み、睡眠の仕組み、ストレスの仕組み、精神の障害と脳の関連、人工知能とその応用など、医学の基礎である行動科学について学ばせる講義およびアカデミックライティングの技法を実施した。

2. 自己点検・自己評価

本年度は昨年度に引き続き学外からもアクセスできる moodle を活用して授業アンケートを実施した（2020年1月7日～31日）。以下に設問の内容を記す。

(アンケートの目的)

このアンケートは、学問基礎論の授業評価に関する情報を全ての学部で共有し、来年度の学問基礎論の授業改善に役立てる目的で行うものです。建設的な回答をお願いします。

質問項目は全部で16項目です。

自由記述欄（任意）にも可能な範囲で回答してください（それぞれ200字まで）。

1. この授業科目は勉学の方法を学ぶ上で役立つと思いますか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

2. 知的好奇心や意欲・関心が高まる内容だと思いますか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

3. 講義や説明は理解しやすいですか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

4. 配布資料や教材に工夫を感じますか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

5. グループ学習の効果を感じますか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

6. グループ学習のテーマは適切ですか？

- ①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない

その理由を以下の欄に記述してください。

7. 課題レポートの作成では、講義の内容が参考になりましたか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
8. グループ学習の際に積極的に発言できますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
9. プレゼン資料の作成において教員から適切なアドバイスを受けられますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
10. 資料の調査方法について教員から具体的なアドバイスを受けられますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
11. 提出した課題レポートに対して教員から適切なコメントを得られますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
12. 他の授業と比べて準備に時間がかかりますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
13. グループ学習を通じて、他者との対話が勉学に重要であると感じますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
14. それぞれの回の時間配分は適切ですか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
15. グループの構成人数は適当ですか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
⑤該当しない
その理由を以下の欄に記述してください。
16. この科目を受講して感じたことなどを 200 字以内で記入してください。

回答率は 56.3% (対象受講者者数 n = 1,164 名)であり、昨年度の 44.2% (n = 1,103)より大幅に向上した。この結果は、アンケートを共通教育係を通じて担当教員に依頼をした効果があ

ったこと、また他の初年次科目の指導のおかげで相互フィードバックの重要性が受講者に理解されるようになったためであると考えられる。今後も教員と学生に働きかけを行い、本科目の質の向上に役立たせることが望まれる。このアンケートの回答データをもとに各学部で総括した結果を以下に記す。

人文社会科学部

①「哲学・思想入門」「心理学入門」「日本史入門」「外国史入門」「地理学入門」「日本語学入門」「日本文学入門」「英米文学・英語入門」、②ミニ・ゼミナールを通じて、文献を読み、レジュメを作成し、発表・議論し、レポートを作成するという大学での基本スキル、③「なぜ人は動かされてしまうのか」の原理を理解し、実際の企業の行動や自身の体験などに当てはめて、思考する幅を広げる、④多文化社会を考える、④経済学的思考、⑤基本判例を抑えつつ、公務員試験過去問を解く、⑥ゲーム理論やマイクロ経済学の入門的なトピックを理解する。また、簡易なモデルを用いて現実を描写する、⑦身近な水産物（エビ）を通じて、先進国と途上国の関わりを考える、⑧政治分析の入門⑨コンビニという身近なものからビジネスについて考える。⑩働くことについて考えるなど、多彩な内容で学問基礎論を実施した。

教育学部

74名の学生から回答が得られ、集計結果は表1の通り概ね高評価であった。教育学部では6回の授業を130名全体で行い、残りの回を6つの班に分かれて活動している。班ごとの授業内容は各教員に委ねているため、グループ学習に力を入れている班や論文の検索やプレゼン資料作成に力点をおく班もある。そのため、個々の質問では、否定的な回答も認められたのは仕方がないとも言える。しかし、11番のレポートにコメントを返すこと、12番の宿題を与えることについては、励行すべきであったと思われ、次年度の担当者に申し送りたい。

表1 教育学部学問基礎論のアンケート集計結果

	はい	どちらかという はい	どちらかという いいえ	いいえ
1. この授業は、自身の勉学の方法論を学ぶ上に役立っていると思いますか？	28	42	4	0
2. 知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？	24	41	9	0
3. 理解が進むような講義形式になっていますか？	27	39	8	0
4. 配布資料や教材に工夫が感じられますか？	24	40	10	0
5. グループ学習による効果は、この授業で感じられますか？	27	34	11	2
6. テーマの設定は適切だと感じられますか？	32	38	4	0
7. 課題レポートの作成では、授業で行った内容が参考になっていると感じますか？	32	37	5	0
8. グループ学習の際に、積極的に発言しようと意欲が湧きますか？	22	36	12	4
9. プレゼン資料の作成方法について、この授業では適切なアドバイスが得られていると感じられますか？	22	36	12	4
10. 授業に関連する資料を調べる際の調査方法について具体的なアドバイスが得られていると感じますか？	33	28	12	1
11. 提出した課題レポートに対して授業担当者からのコメントは十分に得られていると感じられますか？	14	31	21	8
12. 他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？	21	18	23	12
13. この授業でのグループ学習で、他者との対話を通じて物事を多面的に捉えることが重要であると感じましたか？	35	37	2	0
14. 授業内容の時間配分は適切であるように感じますか？	36	28	10	0
15. グループ学習での構成人数は適当であると感じますか？	43	24	7	0

理工学部

今年度の「学問基礎論」科目の理工学部からの受講者数は全 125 名であった。学年別の内訳は、初年次生が 122 名、2 年次生が 2 名、3 年次生が 1 名であった。アンケートの質問項目は全 16 項目あり、質問 1 から 15 項目までは、「はい」「どちらかという、はい」「どちらかという、いいえ」「いいえ」「該当しない」からの選択形式と、およびその理由を記述するものであった。最後の 16 項目目は、受講して感じたことを自由記述で回答するものでした。

アンケート結果を総括すると、全体的には受講生からの評価の高い授業だったと言える。あえて課題を上げるとすれば、課題レポートへのコメントがやや不十分と感じている受講生も見受けられた。詳細な説明を次に述べる。

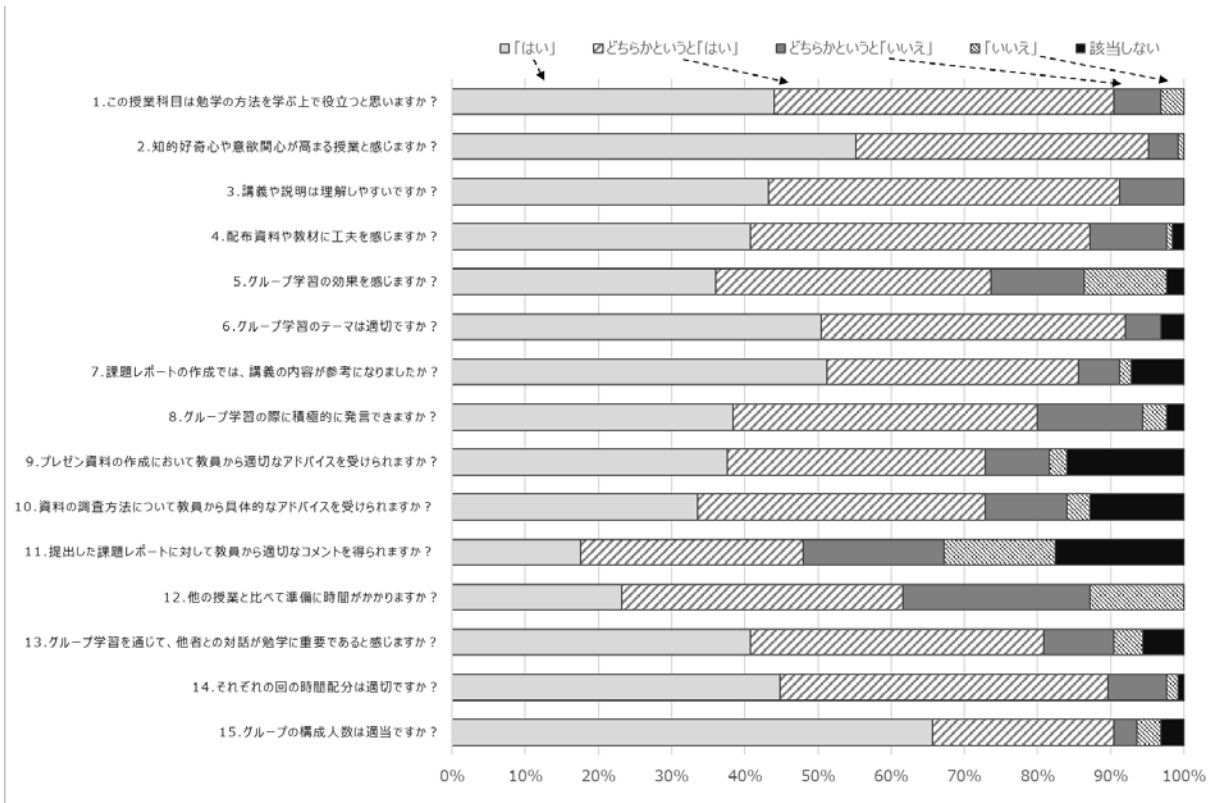


図 1 設問に対する回答の割合 (理工学部)

図 1 に、選択式の設問 15 問に対する回答分布を示す。設問番号 12 以外は、「はい」または「どちらかというとはい」ならば当該授業に対して肯定的な回答であり、反対に「いいえ」または「どちらかというといいえ」ならば否定的な回答内容と判断される。(設問 12 は、授業への準備時間の長さを問う内容であることから肯定的とも否定的ともいえない。) 図 1 の分布状況から、ほとんどの質問に対して「はい」または「どちらかというとはい」が 70%以上を占めている。このことから当該授業は概ね受講者から肯定的に捉えられていることが読み取れる。質問内容に沿って言うならば、勉学の方法を学ぶのに役立つ、知的的好奇心が高まり、講義は理解しやすく、教材は工夫されており、グループ学習は効果的である、と言える。一方、肯定的な回答以外が 50%以上を占めた質問は質問番号 11 の 1 つのみである。この質問は、課題レポートに対する適切なコメントが受けられたかどうか、と問う内容であることから、コメントが受けられなかった、もしくは適切でなかったと捉えられていることが伺える。この質問番号 11 の理由記述回答からいくつかを次に抜粋する。

質問番号 11 について「該当しない」を選択した理由についての記述(抜粋)

- 課題レポートが基本的に返ってこないから。
- 課題レポートをいただいていないように思います。
- まだ見ていないから。

質問番号 11 について「いいえ」または「どちらかというといいえ」を選択した理由についての記述(抜粋)

- 毎回担当者が変わるので、コメントされることがほとんどないから。

- 一回しかない授業があり、まず帰ってきていないため。
- フィードバックが無いことが多いから。
- 提出したレポートに関してコメントが返ってきたことはほとんどないが、その必要もないと考えている。
- 自分のレポートがどう評価されているか分からないから。
- 各先生方が講義を担当するのはほとんどが一回限りで、レポート課題が出されたにしても、提出したものに関してコメントをすることはほぼ出来ようがないと思うから(Outlook 等で送るにしても、先生方はお忙しくて難しいのではないだろうか)。

一方、「はい」「どちらかというとはい」の理由記述には、とても詳細なコメントが受けられた、という内容のものも多く含まれていた。以上のことから、全ての課題レポートに対して十分なフィードバックを得られないケースもあったのではないかと考えられる。受講人数の多い授業であるので、全員に詳細なコメントを回答することは困難であろうと推測されるのだが、あえて課題をあげるとすれば、以上の課題レポートへのフィードバックであろう。

質問 16 の自由記述質問への回答は全 8 件がありいずれも、当授業は大変役立った、という内容の記述であり、このことから当該授業への受講生からの評価の高さが伺えた。

昨年度との比較では、昨年度のアンケート結果では、グループ学習に対する満足度はやや低めに出ていたが、今年度はその傾向は特に見受けられず効果的なグループ学習が実施されたと判断できる。

農林海洋科学部

農林海洋科学部では分野毎の独自性を学科・コースごとに開講して課題設定や学問的関心を高める試みを行っている。下図に示すとおり、いずれの質問項目についても、80%以上が「はい」「どちらかといえば、はい」と回答し、多くの受講生が授業形態に満足している結果となった。問 1 の役立つという点では、グループワークやプレゼンテーション(スライド、説明)の方法について学ぶことができ、将来の卒論に役立つとした回答が目立った。論文講読を行うグループでは興味を持てる材料が提供されていたという回答が多かった。また、講義についても自分の視野が広がったという回答が多く好評であった。したがって、現在のグループワーク・プレゼン発表・レポート課題を主体とした講義進行が受講生に受け入れられていると考えられる。

以上のような好意的な回答がある一方で、5. グループ学習の効果を感じるかとの間に対する評価は 8 割程度であり、また 4. 配布資料や教材の工夫、11. 提出した課題に対するフィードバックの項目がやや低い結果であった。とくに 5. についてはフリーライダーが多く、グループが十分機能していないとする厳しい声があった。また、グループ学習のテーマが実質的に幅が狭く、他の班と重なりが大きく自由に学べないという声もあった。12. 14. の準備に関しては授業時間の制約もあり、自分たちが理解するための時間が十分とれなかったことが伺えた。

以上の意見を踏まえた上で講義内容を改善していくことが必要であろう。今後は公正な成績評価の実施に向けて、カリキュラムの到達目標を明確にすることが必要であると思われる。

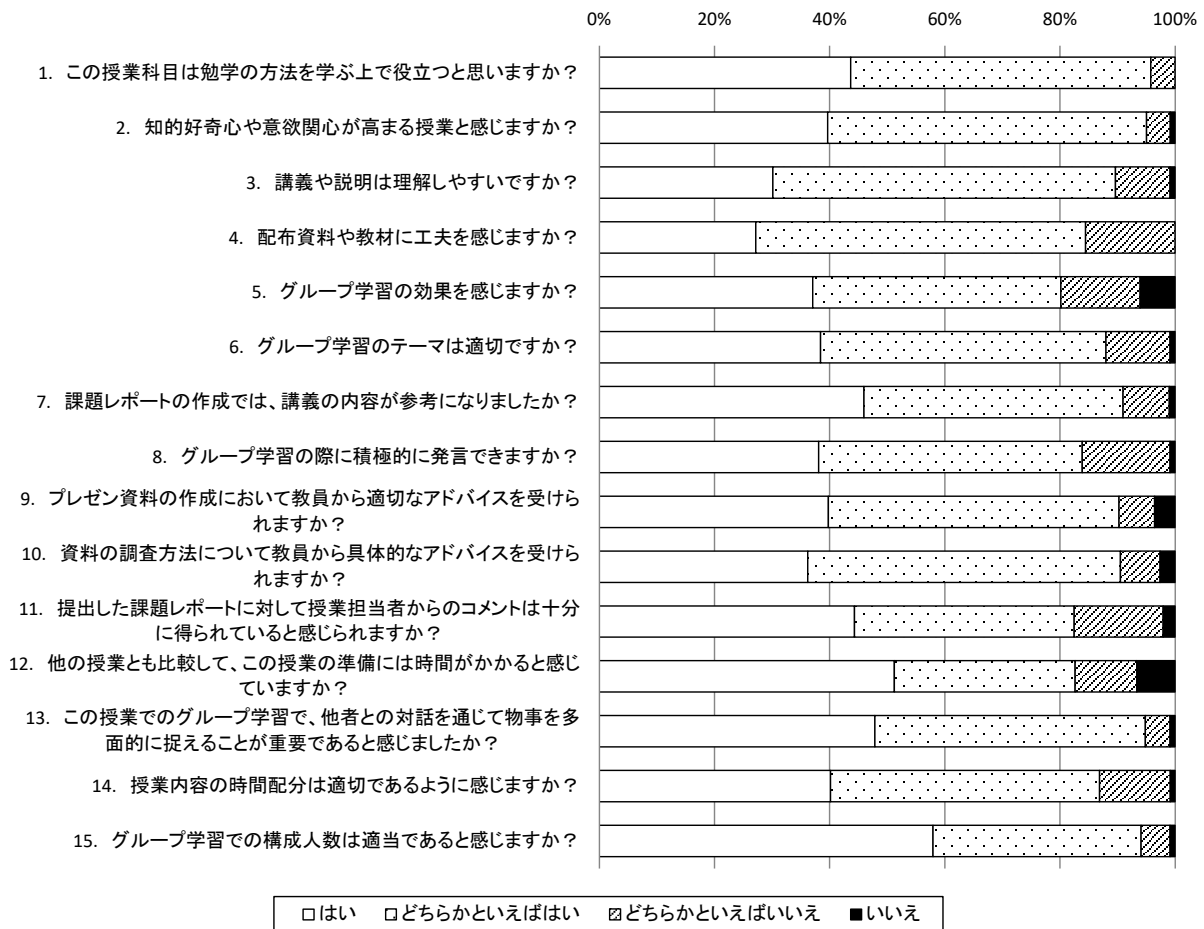


図2 農林海洋科学部のアンケート結果 (n = 122)。ただし「該当しない」(各問平均 7.7 名、標準偏差 7.9 名)を除く。

地域協働学部

2019年度の学問基礎論は、前年度の方針を踏襲し、次の3点を教育目標として実施された。

①社会問題を分析し、実践的な課題や行動指針を引き出すための社会科学的素養を育成すること、②構造的に問題を把握するための技法を習得させること、③グループワークを取り入れた授業方法をとることにより、ファシリテーションを始めとした議論の進め方やプレゼンテーションのトレーニングを行うこと、である。

ただし、地域協働学部での学部改革ワーキングの議論を踏まえ、学部における学問基礎論の位置づけの変更等も視野に入れながら、様々な可能性を検証するために、これまでの「世界の貧困問題」を主要テーマに学ぶものから、①世界の貧困問題、②地域協働論の視座、③異文化理解、④地域協働的アプローチの4つのテーマに沿って学ぶ内容に変更を行った。

①世界の貧困問題については、これまでの方法論を踏襲し、絶対的貧困や相対的貧困の違い、SDGsの取り組みとその重要性等について、毎回、5～6名のグループで内容に基づく討論を行わせる方法を取った。このグループワークに際しては、事前にテキストや資料の担当箇所の内容や、関連して各自がまとめた結果を、ポンチ絵1枚にして準備させ、そのポンチ絵を使って、グループ内で発表し合うようにした。また、授業の最後に、その日のグループワークの内容、状況等について、担当教員が10分以内で講評を行った。

②地域協働論の視座については、実習を終えた4年生2名と卒業生1名を招き、地域協働学部での地域協働実践の内容を紹介してもらいながら、自己の成長と地域の変化、地域協働の射程などを中心に話題提供を行ってもらい、5～6名のグループで内容のまとめや質疑をまとめてもらう方式で行った。

③異文化理解については、インドネシアからの留学生5名を中心に、受講生10名程度にグループ分けを行い、英語によるそれぞれの文化の紹介と文化的差異の発見、共有をインタビュー形式でおこなった。

④地域協働的アプローチについては、一般社団法人高知県こども会連合会にご協力頂き、連合会が抱える諸課題を事例に、地域協働の観点からどのようなアプローチが可能かを5～6名のグループに別れて、事前学習（問題の背景等の下調べ）、改善提案・意見交換（こども会連合会会長による講演、質疑、改善案の修正）、事後学習（振り返り、協働的学びの必要性）を行った。最後に、全15回の内容に振り返りを行い、今年度の学問基礎論のねらいやその達成度について、教員側から説明を行い、学生と意見交換を行った。

アンケートについては33名の回答を得た。アンケートの結果からは、受講生からは概ね良好な結果を得ている（表2）。特に、今年度は昨年までの方針を踏襲しながらも、テーマを4分割したため受講生にとって授業のねらいがわかりにくくなることが懸念されていたが、選択肢「はい」と「どちらかという、はい」を合計したポジティブな評価を見ると、「1.この授業科目は勉学の方法を学ぶ上で役立つと思いますか？（87.9%）」「2.知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？（90.9%）」「3.講義や説明は理解しやすいですか？（90.9%）」について概ね満足を得ているため、教育目標①②に関して、ねらいどおり実施できたのではないかと考えられる。

また、教育目標③に関しても、「5.グループ学習の効果を感じますか？（93.9%）」、「6.グループ学習のテーマは適切ですか？（93.9%）」、「7.課題レポートの作成では、講義の内容が参考になりましたか？（90.9%）」、「8.グループ学習の際に積極的に発言できますか？（90.9%）」当初のねらいどおり機能したと考えられる。

ただし、改善点も大きく分けて3点ある。1つめは、配布資料や教材の工夫の問題である。アンケートでは、相対的にやや低い満足度（81.8%）となっている。これは、今回、テーマを4つに増やしたことで、新たに教材を作成した経緯があり、まだ十分な検討を加えられていない可能性が高い。授業終了時の学生コメント等を活用しながらよりわかりやすい配布資料や教材へと修正を行いたい。

2つめは、「9.プレゼン資料の作成において教員から適切なアドバイスを受けられますか？（54.5%）」「10.資料の調査方法について教員から具体的なアドバイスを受けられますか？（63.6%）」にあるように、資料の作成や情報収集技法に対するアドバイスへの対応である。カリキュラム・マップでは、他の授業と役割分担しながら展開しているため、適宜対応する方針であったが、アンケート結果からは学問基礎論を受講している学生のうち3～4割ほどが、そうした技法に不安を抱えているため、今後、他の2学期授業担当者と連携しながら対応を図りたい。

3つめは、「11.提出した課題レポートに対して授業担当者からのコメントは十分に得られていると感じられますか？（42.4%）」についてである。授業の最後にグループワーク等のコメン

トは 10 分程度行っていたが、個別課題の個人レポートについてはフィードバックが十分ではなかった。授業冒頭の振り返りの時間を有効に使いながら対応したい。

表 2 アンケート結果集計表（地域協働学部）

	はい	どちらかという と、はい	どちらかという と、いいえ	いいえ	該当しない	合計	ポジティブ
1. この授業科目は勉学の方法を学ぶ上で役立つと思いますか？	17	12	2	2		33	87.9%
2. 知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？	15	15	2	1		33	90.9%
3. 講義や説明は理解しやすいですか？	20	10	3			33	90.9%
4. 配布資料や教材に工夫を感じますか？	12	15	3	1	2	33	81.8%
5. グループ学習の効果を感じますか？	17	14	1	1		33	93.9%
6. グループ学習のテーマは適切ですか？	15	16		1	1	33	93.9%
7. 課題レポートの作成では、講義の内容が参考になりましたか？	11	19	1	1	1	33	90.9%
8. グループ学習の際に積極的に発言できますか？	17	13	2	1		33	90.9%
9. プレゼン資料の作成において教員から適切なアドバイスを受けられますか？	7	11	2	3	10	33	54.5%
10. 資料の調査方法について教員から具体的なアドバイスを受けられますか？	8	13	4	3	5	33	63.6%
11. 提出した課題レポートに対して授業担当者からのコメントは十分に得られていると感じられますか？	6	8	6	10	3	33	42.4%
12. 他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？	5	5	11	10	2	33	30.3%
13. この授業でのグループ学習で、他者との対話を通じて物事を多面的に捉えることが重要であると感じましたか？	21	11	1			33	97.0%
14. 授業内容の時間配分は適切であるように感じますか？	20	13				33	100.0%
15. グループ学習での構成人数は適当であると感じますか？	23	9		1		33	97.0%

土佐さきがけプログラム

2019年度の土佐さきがけプログラムにおける授業評価アンケートでは、4名の回答が寄せられた。16個の質問のうち、2名は、そのほとんどは「はい」あるいは「どちらかという、はい」という回答であり、学問基礎論の授業内容に対して好意的であり、比較的積極的に授業に参加できたことが受け取れる。一方、残りの2名は、そのほとんどが「いいえ」あるいは「どちらかという、いいえ」という回答であり、この授業内容に対して否定的な印象を持っていることがうかがえた。

主に否定的な回答の学生のコメントには、「質問 1. この授業科目は勉学の方法を学ぶ上で役立つと思いますか？」に対して「先生方によって役に立つ内容とそうでない内容の差が目立つ。」「最終エッセイを書くまでの過程における授業の趣旨がよくわからなかった。」という記述があった。また、質問 11 の課題レポートに対するコメントに対する満足度を問う質問に対して、「(コメントを) 得られてはいるがなぜだめなのか具体的な理由がない。」という記述もあった。

また、質問 5 「グループ学習による効果は、この授業で感じられますか？」に対しては「該

当しない」「いいえ」の回答が2名であり、上述の否定的な2名と同じ回答者であった。一方、上述の好意的と思われる回答者の2名は、質問5に「はい」と回答しグループ学習を実施したようであった。

これらのことから、否定的な回答の学生は、“何を目的とし授業なのか不明確”と感じたことがうかがえる。そのため、学問基礎論の授業目的を明確にする必要があると思われる。また、好意的な回答をした2名がともにグループディスカッションする時間を設けているところであったことから、グループディスカッションの時間を設けたほうが、学生・教員の両方にとって授業目的を理解しやすいかもしれない、と考えられる。ただし、グループ学習は他の授業でも行っている。

以上のことから、学問基礎論においてグループ学習を取り入れることが有効と考えられ、また、他のグループ学習に対して学問基礎論でのグループ学習の目的を明確化するが、学問基礎論の今後の課題といえる。

医学部

医学部では、医学科と看護学科はそれぞれ独自の内容を実践している。

医学科では、2016年度から医学の基礎的な学問としても位置づけられている行動科学に焦点を当てたコースを実践している。これは、2023年に予定されている医学教育分野別評価の評価基準に合わせたものになっている。さらに、今年度から学生総合支援センターの坂本智香先生にご協力頂き、アカデミックライティングの授業を2コマ導入し、レポート作成などの方法を学ぶ機会ができた。また、1年生のモチベーションを維持するために、心理学、解剖学、生理学、公衆衛生学、精神医学の領域を中心に、専門教育の入門、基礎編となる授業を展開した。具体的には、脳の構造と働き、記憶、学習、感情、睡眠、ストレス、人工知能、行動変容（ニコチン依存、慢性疾患管理）、行動と疫学、物質依存の講義を行っている。各授業では、ペーパーレス化を進めるため、授業スライドの提供、小テストをmoodle上で実施し、さらに自己学習を促進させる仕組みを整えた。医学科では、「統合医学Ⅰ」にてグループ学習を中心に行っているため、学問基礎論では主に講義を行っている。

看護学科では、看護を学ぶ初学者として今までの生活（自分自身や家族、地域）を振り返り、健康的な生活とはどういうことなのかを考え、ディスカッションを通して人間の健康と環境に繋げていくことを目標に授業実践を行った。さらに臨床早期実習を行い、学生それぞれの体験を学生間で共有し新しい発見をしながら看護学に対する興味や関心を深める内容となっている。

アンケート結果を図3に示す（但し実践を行っていないグループ学習の項目を除いた）。

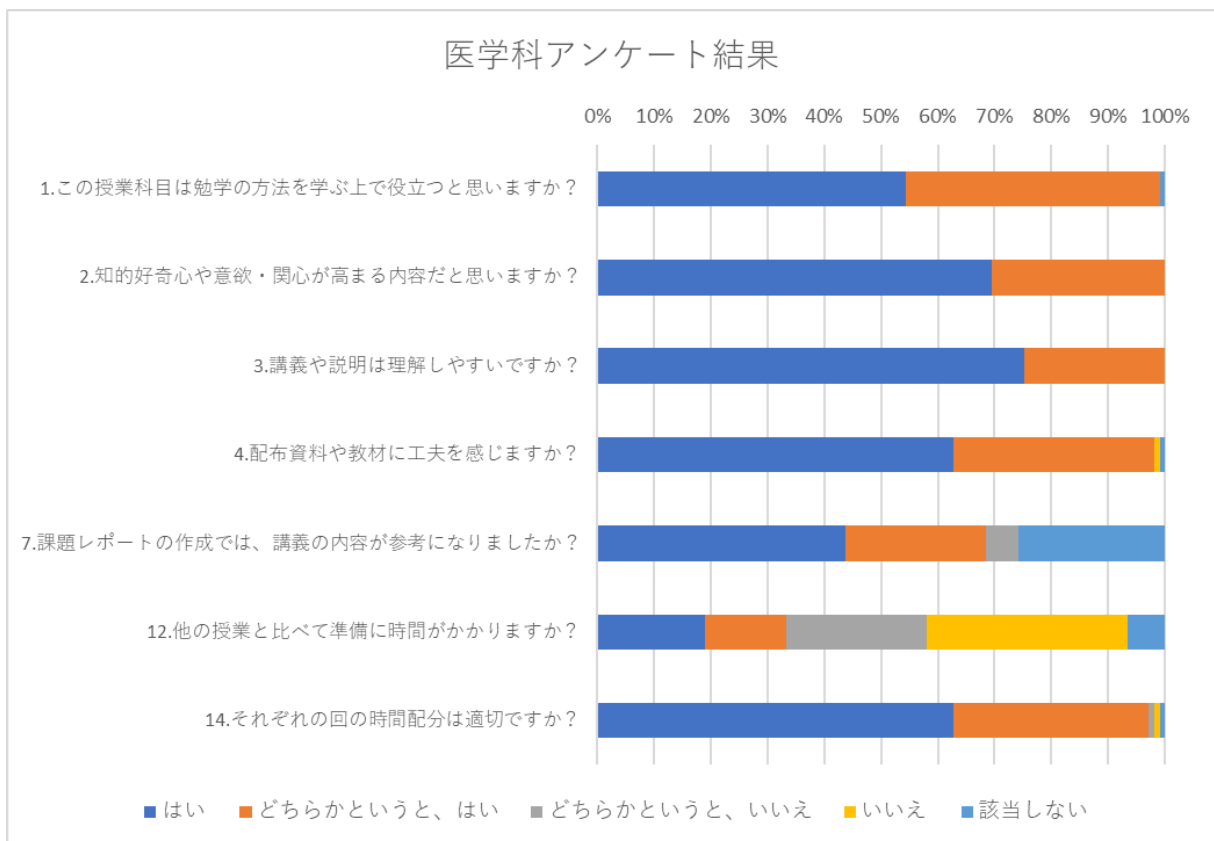


図3 医学科アンケート結果

各問いに対する主だった意見は以下のようだった。

1 この授業科目は勉学の方法を学ぶ上で役立つと思いますか？

- ・ 人の構造について勉強できたので
- ・ 医学の基本となる様々な分野の知識を学ぶことが出来るから。
- ・ アカデミックライティングのようにレポートの書き方など、必須技能を教える单元もあるため。
- ・ 復習テストで授業内容の理解が深まると分かったから。
- ・ 医学科1年生では、あまり医学的な内容を学ぶ機会がないため、この学問基礎論という講義で初歩的な内容を学ぶことが出来たと思う。
- ・ 医療の勉強に遠い一年のうちから様々な知識に触れられてよかった。

2 知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？

- ・ 医学の内容を取り上げていて、興味のある分野だったから。
- ・ 授業で学んだことに対し、更に詳しく知りたいと思う事があるから。
- ・ 医学にほとんど触れていない1年生の興味を引く内容だと思ったから。
- ・ 先生の説明が分かりやすいから。
- ・ あらたな今まで興味のなかった分野を知ることで興味をかき立てられるから。
- ・ 一年時にはあまり専門的な医学分野は学べないが、この授業では学べたから。
- ・ より発展的な内容を学びたいという思いが強くなったため、今後の医学学修が非常にたの

しみになった。

- ・ 実際の医学に近いことを学べる数少ない授業だったから。
- ・ 他の授業では踏み込んだ内容をあまり学べないのでためになった

3 講義や説明は理解しやすいですか？

- ・ 実際の患者さんの話などもとりあげていたから
- ・ スライドがあってわかりやすかった
- ・ 資料や、具体例、写真を使いながら、授業してくれるので、目で見ても理解しやすい。
- ・ 専門的な内容には補足がつけられていたから。
- ・ 先生が具体的な例を挙げてくださるから。
- ・ 先生がたの説明は懇切丁寧であり、学生が理解しにくいであろう箇所を詳しく解説してくれたため。
- ・ 図を多く使い、視覚的にわかりやすかった

4 配布資料や教材に工夫を感じますか？

- ・ どんな端末でも穴埋めがしやすいように Word 形式と PDF 形式それぞれの資料が配布されていたから。
- ・ 講義で使用する資料などもネット上にアップされていたため、勉強がしやすかった。
- ・ 自分で記入が出来るため、覚えやすい。

7 課題レポートの作成では、講義の内容が参考になりましたか？

- ・ まだ医学に対しての理解や、知識が無いので、授業で学んだ事を応用してレポートを作成しているから。
- ・ 確認テストにその日の授業内容がそのまま出るため
- ・ 講義が詳しくあったから。
- ・ レポートを作りやすかったです。
- ・ 毎回の授業後のレポートや小テストで必要事項を確認することが出来た。

16 その他、この科目を受講して感じたこと。

- ・ 熱意のこもった授業だったため、とてもためになった。
- ・ 医学的知識に触れることができ、どうしても教養系の科目になってしまう一年のなかでも興味を維持してくれた
- ・ 学習内容に興味を持てたこと。
- ・ 興味深い授業ばかりでした。ありがとうございました。
- ・ 初歩的な医学に関しての知識をみにつけることができた。
- ・ 医学に対する興味が芽生えた
- ・ 医学について基礎的なことを学べて勉強意欲が湧きました。

全体的には、概ね医学への興味をもち、学習へのモチベーションを上げたいという目的に沿った内容であったと思われる。

3. 全体総括

以上の結果から、各学部とも受講性の満足度は概して高く、各学部での授業形態は概ね受講生に受け入れられていると考える。しかし、グループワークの主体性が受講生間でばらつくケースや、相互コミュニケーションや課外活動の不足、提出課題のフィードバック不足など、いくつかの学部に共通した問題点も見いだせた。また、キャリア教育が入っているため講義の目的や全体のカリキュラムの流れをよく把握できていないとした回答例もあり、これらの意見に対して担当教員間の意思疎通を図る必要がある。その他の結果も踏まえ、講義内容をさらに改善していく必要がある。

今回の moodle を使用したアンケートによる評価は学生のフィードバックの一法であるが、アンケートシステム、設問内容、開催時期については今後引き続き検討していく必要があると考えられる。

4 人文分野分科

カリキュラム編成に関する報告

人文分野分科会長 大櫛敦弘（人文社会科学部）

1. 令和元年度の次年度カリキュラム編成の経過

(1) 平成30年10月23日の第3回共通教育実施委員会において令和2年度の共通教育に係る担当体制(案)が提示されたのをうけて、11月6日に分科会を開催しカリキュラム編成にとりかかることになった。その間、後述する物部出講体制や、芸術分野・音楽の非常勤講師の後任者が見当たらず結局継続を断念するなどの問題もあったが、おおむね順調に編成作業は進行了した。

(2) 12月13日に令和2年度人文分野開講授業題目表をとりまとめて作成し提出、令和2年1月21日の第3回カリキュラム等編成部会、2月6日の第6回共通教育実施委員会においてそれぞれ承認された。なお、とりまとめに当たっては、今回も分科会委員、共通教育係の各位に多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

2. 令和2年度カリキュラム編成に向けた課題

(1) 担当体制の問題

後任不補充による担当教員の減少の影響は、改善されるどころかさらに深刻の度を増しており、分野によっては最低限の授業展開が危ぶまれるような状態に立ち至っている。昨年度の報告でも「以上は本分科会に限定される問題ではないが、やはり『履修機会や授業の質の保証』を確保する意味でも、担当教員減少への歯止めや施設の整備など、共通教育の立場からも積極的に声を上げていただきたい」と述べたが、今回も同じことを繰り返さざるをえない。

(2) 物部キャンパス出講の分野間ローテーション

この問題については、昨年度からの先送り事項となっていたが、今回のカリキュラム編成作業においては構成員の理解の相違が顕在化するなど、今後の枠組みとなる原則を定めるには至らなかった。(1)で述べた問題とも関連するが、全体の母数が減少している中で、後任不補充や突然の転出などによって、各分野間の割合が大きく変動するようになっていることも一つの重要な要因となっているようである。こうした状況のもとでも安定した出講者を選定できるようなルールを定めることが必要とされている。

(3) 第68回中国・四国地区大学教育研究会の開催

次年度は本学が開催校となることとなっており、全体の基調講演での人文分野からの講演者として、今年度退職される哲学・倫理学の武藤整司先生に引き受けていただくこととなっている。また二日目には社会分野と合同で分科会を運営することとなっており、

現在、大学教育を取り巻く状況は大きく変化しており、文系の教養教育においても対応を迫られている。こうした中で「何が教養教育に欠かせないか」という視点を軸として、たとえば(後任不補充による)各分野をカバーする教員の減少にどのように対応しているのか、あるいは授業の質保証の要請にいかに対応するか、さらには文系の授業・学問の意義や役割をどのように伝えるのか等々、それぞれの現場での取り組みの事例を具体的に紹介してもらうことによって現状を認識し、対応の糸口を見

いだす契機としたい。

との概要案のもと、鋭意準備を進めている。

令和1年度 共通教育人文分野分科会 FD活動報告

人文分野副分科会長 梶原彰人（教育学部）

今年度の本分科会 FD 活動として、まず、2019年10月から2020年2月にかけて、他大学における教育の質保証に関する FD 活動について聞き取り調査を行った（上越教育大学、山梨大学、滋賀大学、岐阜大学、山形大学、島根大学、香川大学各教育学部など）。聞き取り調査を集約すると、学生からのアンケートや、ネットシステムによる講習などが主な取り組みであった。中でも、山形大学（現在進行中）、滋賀大学（最新は平成28年度）、は全学的な取り組みを行っていた。山形大学の取り組みは現在のところ基本的には理数分野に絞って行われており、人文分野は今後検討していく、という内容であった。滋賀大学はより一般的な取り組みであり、その内容は、フォーラムの開催、成績分布の共有、教員相互による評価、学生によるアンケート、卒業予定者によるアンケートなどであった。

去年度の本分科会 FD 活動は、「成績評価の基本情報の確認、現状の分析と意見交換」であった。これは、平成30年度に施行された「公正な成績評価の実施に向けて（申合わせ）」の確認と成績基準の平準化のための一つの取り組みとして、2017年度後期、2018年度前期の共通教育人文分野の成績評価を分析し意見交換する、という内容であった。

以上を踏まえて、本年度は、滋賀大学の取り組みを参考にしながら成績評価の分析時期を広げ、2018年度前後期～2019年度前後期の共通教育人文分野の成績評価について分析した。その結果、2018年度前期の成績評価では、「秀」および「優」評価をつける教員が減少したが、2018年度後期以降は2017年度後期に近い割合で推移していることがわかった。

その結果を用いて、2020年3月9日11時から12時まで、FD研修会（成績評価について、去年度以降の推移の共有および意見交換）を行った。研修内容は、令和元年12月16日に一部改正され令和2年度から施行される「公正な成績評価の実施に向けて（申合わせ）」及び「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていることを担保するための体制の構築」（令和元年12月16日一部改正）の確認と、上記分析結果や成績評価の推移の共有及び意見交換であった。意見交換では、成績評価に関する意見や質保証の問題、人文分野ならではの教員の工夫、そもそも公正な評価とは何か、などについて意見交換がなされ、今後に向けて有意義な時間となった。本研修会の参加者は5名であった。

人文分野分科会副分科会長 日比野桂（人文学部）

2019年度共通教育成績評価分布の解析結果について期間内に開講された授業の分析を試みたが、特に大きな問題となる授業は存在しなかった。2018年度2学期開講科目については優以上の評価が受講生50%以上であった授業は5科目であったが、その内4科目は分析対象外

の目安となる教育活動に当てはまっており、実質1科目(5%)のみであった。基準を超えた評価を行った科目は1科目のみであり、今年度の開講においては改善されたと言えよう。一方で、優以上の評価が受講生の50%以上という基準により到達基準を上回る優秀な学生に対して不正に厳しい評価するような事態が起こっていることが懸念される。特に少人数の授業においては受講生1名1名の影響力が大きい。少人数ならば学生も質問がしやすく、教員もフィードバックを行いやすい。その結果、到達基準を上回ることも起こりやすくなるし、受講生が多い授業と比べ秀や優の比率が高くなりやすい。学生にも告知せず、授業内容も受講生の質も均一ではないものに一概な(優以上の成績を修める学生の比率が50%)基準を設定すること自体公正ではないと感じる。シラバス等で事前に到達基準を示しているため、事前に提示した基準に従う方が教育の質を保証しているとはならないだろうか。

なお、最後に本分科会ではFD活動としても成績評価について取り上げた。具体的内容については該当の報告書をご参照いただきたい。

5 社会分野分科会

令和元年度 社会分野分科会・カリキュラム編成に関する報告

社会分野分科会長 切詰和雅（人文社会科学部）

◆カリキュラム編成

1. カリキュラム編成の経過（令和元年 10 月～令和 2 年 2 月）

基本開講数 47 コマについて、人文 27、教育 5、地域協働 15 と決定した。社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部は次年度担当体制について依頼をし、担当者・時間割を調整し決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整し決定した。

令和元年度のカリキュラムにおいては、社会分野が担うべき基本開講数 54 コマの他に、各学部等の協力を得て多様な科目を開講するカリキュラムを編成できた。

上記の基本開講数に加えて、教養科目においては 26 科目の題目を人文学部、地域協働学部、地域連携センター、総合教育センター、国際連携センター、評価機構、安心・安全機構、全学教育機構等の協力を得て編成することができた。

平成 31 年度は社会分野で計 73 科目が開講され、うち 8 科目は新規開講である。

平成 28 年度から共通専門基礎科目という科目区分が廃止されることになったが、27 年度以前入学の学生が令和元年度も十分科目履修できるよう、6 題目程度を人文社会科学部の協力を得て編成することができた。

2. 令和元年度カリキュラム編成のポイント

(1) 物部キャンパス開講科目については、27 年度の農学部教務委員会との協議を経て、人文分野と社会分野を合わせて毎年 5 題目開講することとなった。さらに、人文分野分科会との協議の結果、社会分野については、28 年度に 3 題目、29 年度に 2 題目、30 年度に 3 題目を開講することになっていた。したがって、30 年度の物部開講数は人文社会科学部 2 題目、地域協働学部 1 題目とした。平成 31 年度以降、物部開講科目は 2 題目となり、平成 31 年度は人文社会科学部 1 題目、地域協働学部が 1 題目開講することとなった。また、令和元年度、地域協働学部との協議を経て、令和 2 年度以降、人文社会科学部 1 題目、地域協働学部が 1 題目開講することとなった。

3. 課題

(1) 28 年度から共通専門基礎科目については廃止されたが、読み替えによって学部専門科目に以降された科目も学部の基本開講数(ノルマ)としてカウントした。しかし、いずれ共通専門基礎科目として履修する学生はいなくなるので、今後のカリキュラム編成に際しては他分野との均衡なども考慮しながら、推移を見守る必要がある。

(2) 教養科目の基本開講外の開講科目が 26 題目あることは、多様な科目を提供するという観点からは歓迎すべきかもしれないが、センター関係の教員の増えていることなどから、各学部

のノルマの見直しに結び付けるなどの対応も必要かもしれない。

(3) 全学的改組が進行する中、各学部、センター等に配置される教員が増えてきており、共通教育委員会として新規授業の開講をお願いしているところである。教養社会分野を担当できる教員数に合わせて、ノルマ等のあり方について検討すべきである。

(4) 共通の名称の科目（「経済を考える」等）について、それぞれの科目が特色のある内容となっているため、副題を付けるなどして、その内容が学生に分かりやすくすることを検討してもよいだろう。

◆ 自己点検・評価活動

1. 令和元年度 自己点検・評価活動の実施状況

令和元年度は、共通教育社会分野における自己点検・評価活動として、授業アンケート及び、第5週目/第15週目アンケートを実施した。実施状況は以下のとおりとなっている。

(1) 共通教育社会分野の授業アンケート実施科目数（1学期/2学期）

第1学期	1件	コミュニケーション論（担当教員：高橋美美(医)）
第2学期	0件	

(2) 第5週目/第15週目アンケート結果（社会分野）

第1学期	1件	メディア社会論（担当教員：遠山茂樹(人)）
第2学期	1件	はじめてのマーケティング（担当教員：喜村仁詞(アドミッションセンター)）

2. 今後に向けて

昨年度に比べ、アンケート実施数は大幅に低下した。要因は今年度より、アンケート実施が例年とは異なり、e-ポートフォリオ上での実施となり、その結果、アンケート実施を行う教員が少なかったことが考えられる。

また、アンケート結果についても、昨年度までは共通教育係において集計を行っていたことで実施状況やアンケート結果が集約されていたが、今年度より、授業担当教員以外、アンケート結果を閲覧することができないシステムとなったことから、実施結果についての把握が困難となった。

上記の点は次年度以降改善を図っていく必要性があり、早急な検討や実施に対する共通理解が求められる。

◆FD活動

1. FD 企画の概要

テーマ：FD 企画 FD の知見を基にした講義の実践と課題

2. FD 企画の内容と総括

これまでのFDの知見を基にした講義の実践例と課題から、今後の質保証に関するFDの方向性を示すことを目的として、インタビュー形式で実施した。

今年度は、これまでに蓄積してきたFDの知見を基に、実際の講義で活用した際の手応え(実地)について、講義担当者にインタビューすることを試みた。

FDの基本事項としては、講義時における教員のパフォーマンス全般(レジュメや資料の作成の工夫、声の出し方、アイコンタクト等々)の向上が挙げられる。当然そうしたパフォーマンスのスキルは年々回数を重ねるごとに研鑽されてゆき、より質の高いレジュメや資料、講義が期待できる。ところが、そうした教授サイドのスキルが上昇するのと反比例して、受講サイドの積極性が年々後退しているように感じられる事態となった。もちろん、受講者全員がそうであるということではないにしても、その割合は増加しているように思われる。これまでのFDは専ら教授サイドのマインドやスキル向上にフォーカスしてきたといえるが、それだけでは学びの質を保証するには限界がある。良い講義というのは決して一方通行ではなく、教授サイドと受講サイドとが良好な授け受けするというインターアクションが不可欠であろう。良い講義であれば受講生も熱心に傾聴し、受講生が熱心に傾聴すれば、自ずと講義の質も高まるはずだからである。

3. 今後に向けて

これまでのFD企画でも指摘されているように、FDで得られた知見は何らかの形で共有・公開され、実践と反省を繰り返す、研鑽されていくべきである。まずは教員サイドで最大限、質保証に努めるべきであるが、そこには限界がある。そもそもFDの主眼が学生の学びの質向上であることから、今後のFDの方向性としては、学生サイドにも学びの姿勢や動機付けを啓発する何らかのプログラムをも考案する必要がある。

6 生命・医療分科会

令和元年度共通教育実施機構会議活動報告書(カリキュラム編成)

生命・医療分科会会長
野田 智洋 (医学部)

1. 令和元年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 1月29日(火)：例年どおり、学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成31年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 2月14日(木)：すべての部局から授業計画が提出された。教育学部の担当が駒井先生の退職に伴い幸先生に変更となった。
- ・ 2月14日(木)：代表者に授業計画一覧表を送り、シラバス登録を依頼した。
- ・ 4月11日(木)：授業を開始した。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野に立って授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。

2. 令和元年度カリキュラムの変更・改善点

「健康」Aの代表者は引き続き教育学部の矢野先生が、Cの代表者は駒井先生の退職に伴い幸先生が担当することになった。Dの代表者は井上顕先生が引き続き担当して下さる。「アルコール学概論」に加えて、一昨年度から岩崎泰正先生による「一般学生のための医療と医学の知識」が引き続き開講されたため、この分野の選択肢が増えている。学生による授業評価アンケートでも好評のようである。担当の先生方に感謝したい。

3. 令和2年度への課題

「健康」は、A～Dの4科目をすべて1学期に開講しているが、今年度の受講者総数は435名に減少した(H30年：589名)。一科目あたりの受講者数は平均108.75名となり(H30年：147.25名)、先生方の負担も少しは軽減された。授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。

教育学部の保健体育コースは、4名体制で健康とスポーツ科学講義及び実技を維持することになる。医学部の担当者も補充なしとなるため、さらなる授業担当コマ数の負担軽減が望まれる。

1. 平成 30 年度「健康」

「健康」A - D4 クラスの履修学生を対象として、平成 30 年度 1 学期に授業評価アンケートを実施した。質問項目は、学部、学年、性別、授業内容の評価 12 項目、授業を受けての自身への影響 3 項目、自由記載である。有効回答数は A クラス：116 名、B クラス：81 名、C クラス：110 名、D クラス：112 名であった。

1) 回答者の特徴

(1) 学部別のクラス人数

A-D のクラス別にアンケート回答者の学部を示す（図 1）。クラスによって回答者の学部に偏りがあった。理学部は D クラスの選択者が多く、教育学部は B クラスの選択者はいなかった。

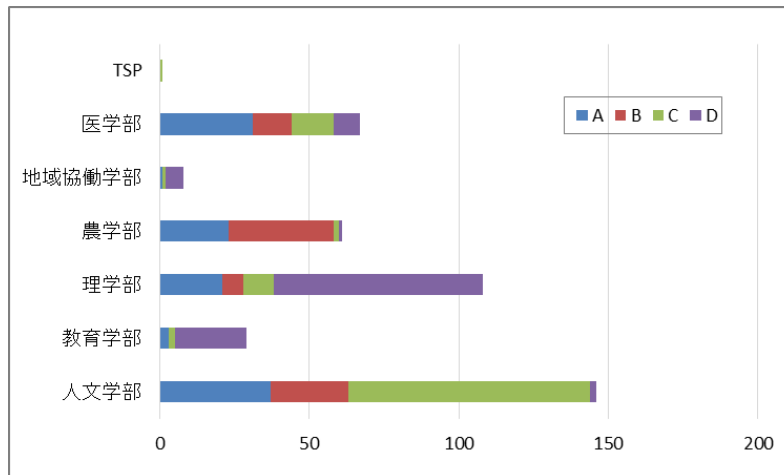


図 1. 学部別のアンケート回答者数

(2) クラスの学年割合

A-C クラスでは 1 年生が 85%以上を占めており最も多かった。D クラスは 1-3 年生がそれぞれ、32%、38%、26%の割合であった。

2) クラス別にみる授業評価 15 項目の結果比較

評価指標 15 項目の結果をクラス別に示す（図 2）。項目 1-12 は授業内容に関する項目である。うち項目 1-7 は教員の準備状況や取り組みに係る内容であり、項目 8-12 は学生の授業への関心や満足を問う内容である。

項目 1-12 のいずれにおいても、各クラスでの大きな隔たりはなかった。「2. 教員の声の大きさや話し方は聞き取りやすいか」の質問では、D クラスが他の 3 クラスよりも低いことから、使用教室の機材調整を行うことが必要であると考えられる。

「4. 授業の進み方や内容量はあなたにとって適切か」の項目は、他の項目に比して全クラス平均点がやや低かった。29 年度の評価においても同様に平均点は低い結果となっていた。このことは、「7. 授業に対する教員の熱意を感じるか」が高いことから、各担当教員の学生に

伝えたい情報量の多さが、「6. 教員は受講生が質問や意見を述べる機会をつくり答えているか」の評価の低さに関連しているのかもしれない。

授業を受けて学生自身への影響を問う質問項目 A-C は、例年どおり各クラスとも高い評価であった。受講学生は学部の違いはあれども「健康」の授業を受けることで「健康に関する理解を深め」、そして「学生自らの健康について改めて考え」、その結果「今後の生活の参考にする」ことを考えていた。これらのことから、本授業は勉学の基本となる健康の自己管理ができるようになることはもとより、向後に起こりうる健康障害を回避するための多様な知識を得て生活習慣の改善を行うことにもつながっている。

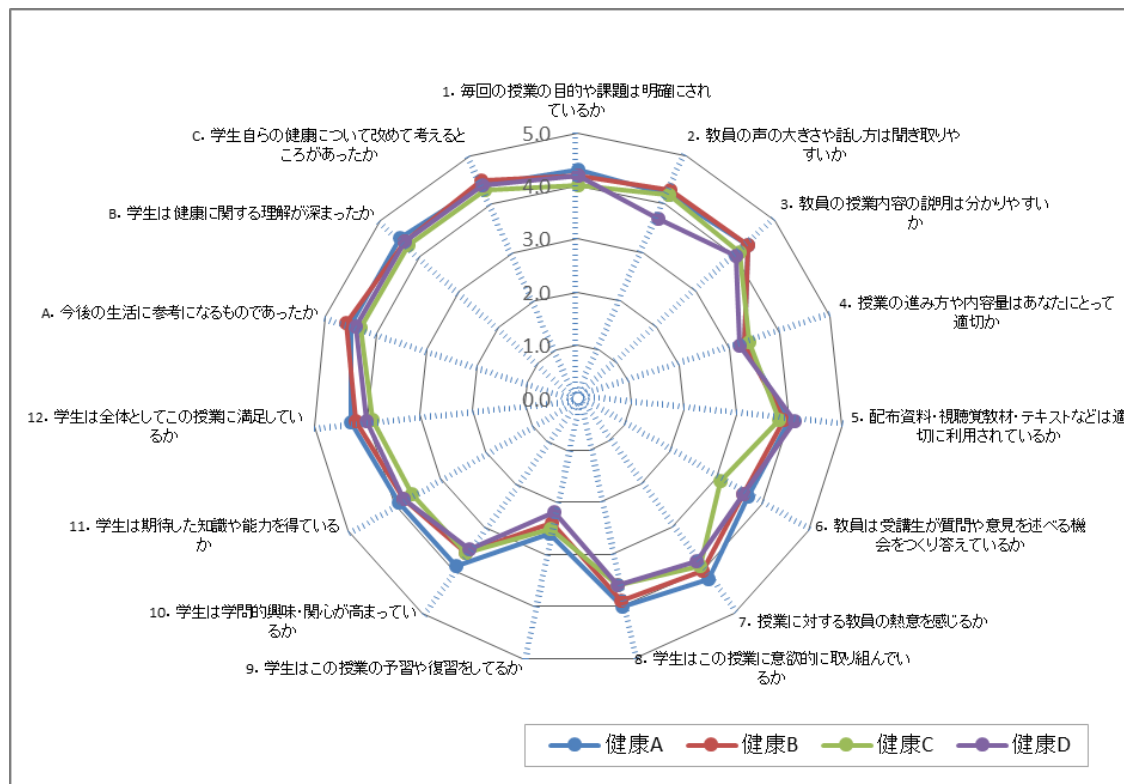


図 2. クラス別の授業評価 15 項目

3) 自由記載結果のまとめ

A - D クラスの自由記載の結果を示す (表 1)。回答を得た A-D クラス 423 名中、自由記載に回答した学生は 156 名であった。

授業環境等については、エアコン調整や学生の私語、資料についての要望があった。

表 1. 自由記載の主な内容 (複数回答)

■授業環境等についてのコメント	
1. エアコンが効いていない	1
2. 特定の学部の学生がうるさい	2
3. 講師の声が後ろの席まで聞こえない	4
4. パワーポイントが少なく内容が伝わらない	1
5. パワーポイントの文字が小さく見え辛い	3
6. 医療場面の放映は事前の告知を希望する	1
■授業内容についてのコメント	
1. 健康の授業への満足	40
2. 多角的に健康に関する知識を習得	23
3. 健康についての考え直し・再認識	37
4. 健康への視野の広がり	8
5. 健康への意識の高まり	5
6. 健康維持・生活改善のための決意	20
7. 健康のための具体的行動を考える	10

授業内容については、「1. 満足した」との回答は 40 件であった。「身近な話題」の内容で、「自分の生活や体調に投影して考えられた」こと、「ふだん意外と健康について学ぶ機会がない」ことから、学生の満足につながったようである。またオムニバス形式である本授業の特色から、「2. 多角的に健康に関する知識の習得」ができていた。「普段聞きなれた[健康]はあらゆる要因を含んでいるものであること」の理解が、「3. 健康への視野の広がり」や「5. 健康への意識の高まり」という学生の学びになっていた。さらに、授業を受けて「6. 健康維持・生活改善のための決意」をした学生がおり、「生活習慣を改善する必要性を感じた」とコメントしている。そして、多くの学びが「7. 健康のための具体的行動を考える」という学生の行動変容にまで影響を及ぼしており、食生活や睡眠習慣などの改善を実行するという行動に結びついていていた。昨年の授業評価との比較では、「生活改善を決意する」、「具体的行動を考えてみる」の記載は、2 倍の回答数があった。

自由記載の中に、心の健康に関するものが 6 件あった。「大学に入ったばかりでいろいろと不安だったりストレスがあったけど…」や、「自分はメンタルが弱い方なので…」という記載があり、本授業が学生の心の負担を軽くし、前向きに学生生活を過ごすことにも影響していた。「自分の生き方やモチベーションを上げてくれるような授業を増やしてほしい」という要望が 1 件あり、今後学生の状況に即した内容の検討が必要かもしれない。

4) まとめ

健康 A-D の授業を通して学生は健康の認識を新たにし、自身の健康と向き合い、さらに学生の一部は生活習慣の改善を実行していた。今後、教員が授業評価アンケートの結果を踏まえ、学生の状況・希望に即した内容を授業に意識的に組み入れるよう検討することも、学生の健康の維持・向上に有用であると考えられる。

7 自然分野分科会

自然分野分科会会長 波多野 慎悟（理工学部）

1. 自然分野分科会の運営体制

本年度の自然分野の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」こととした。これを実現するために、自己点検評価活動やFDとも連動して、カリキュラム等編成に関する課題を点検し、編成作業を進めてきた。

本年度の自然分野分科会は次に示す12名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には農林海洋学部の柏木丈弘委員が、自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の加納理成委員が選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：波多野慎悟、分科会副会長（FD 担当）：柏木丈弘、分科会副会長（自己点検評価担当）：加納理成

その他の委員：伊谷行（教育学部）、土基善文・島内理恵・有川幹彦・山田伸之・老川稔（理工学部）、関安孝（医学部）、松岡真如・寄高博行（農林海洋科学部）

2. 令和2年度カリキュラム等編成

令和2年度のカリキュラム等編成は、次のような手続きで行われた。第1回カリキュラム等編成部会（7月23日開催）において、人事ポイントの変化に応じて各学部への担当コマ数が割り振られた。自然分野に関していうと、理工学部、教育学部は前年度比1減、農林海洋学部は前年度から変化無しの案が提示された。各学部にお問い合わせしたところ当分野に関する異存はなく、第2回カリキュラム編成部会（10/2）・第3回共通教育実施委員会（10/23）を経て、原案どおり令和2年度の自然分野の担当コマ数を教育学部が7、理学部が47、農学部が13とすることが承認された。この担当体制に基づき令和2年度のカリキュラム等編成作業を開始した。また、編成作業に加え授業題目の英語名についても検討し、加筆していただいた。このように編成された科目は第3回カリキュラム編成部会（1/21）に提出され、原案どおり承認された。

本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規開講】

- ・「単細胞生物のはなし」 2単位 担当：松岡達臣（理工学部）
- ・「バイオサイエンスの世界」 2単位 担当：砂長毅・藤原滋樹・杉山成・湯浅創・山崎朋人（理工学部）
- ・「数学をとおしてみた生物」 2単位 担当：加藤元海（理工学部）

【題目変更】

・教養科目：「高知の農業と自然を实践して学ぶ」→「高知の最先端農業 — I o P (Internet of Plants)」

【廃止】

- ・「植物の生殖」 2単位

・「植物バイオテクノロジー概論」 2単位

また、令和元年度に新規開講された県寄付講座「さわってわかる AI 講座 ～基礎理論からクラウドサービスを使った実践まで～」については、非常勤講師の資格審査を 6/28 に自然分野分科会で行い承認された後、共通教育実施委員会（7/23）で承認された。次年度開講も詳細については県予算決定後となる。

3. 自己点検・自己評価

10月30日に分科会長が共通教育主管と有川カリキュラム編成委員長と面談を行った。自然分野として開講されている科目を点検し、各科目の受講生数が適正かどうか（極端に大きかったり少なかったりしないか）、開講の妥当性があるか、成績分布に極端な偏りがあるかどうか等について詳細に検討した。(1)各学部／各分野のノルマ負担の公平性の担保、(2)旧共通専門科目などの取扱いなど、考えるべき点はあるが、今後担当体制の改定が行われることが分かっているため、その内容が具体的になってきてから検討を行うべきと考える。

4. FD 活動

本年度、自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。

5. 「第 68 回中国・四国地区大学教育研究会」分科会テーマの検討について

12月20日に開催された実行委員会で研究会開催に向けたスケジュールが提示され、それに従って1月中に自然科学分科会テーマについて、分科会長から自然分野分科会メンバーに案を提出し、承認された。

8 外国語分科会

外国語分科会長 今井典子

1. カリキュラム編成について

本年度も、専任の担当教員の減少に加え、非常勤講師（特に、「大学英語入門」と「英会話」）の確保が困難になるなど、カリキュラムを維持するのに苦労した。このことに関しては、昨年度の分科会でも、数少ない非常勤講師を効率よく配置できるカリキュラム上の工夫を、全学的に検討していく必要があることが課題に挙げられていた。

以上のことを受け、週2回の時間割が固定されていることから、非常勤講師との時間の調整が大変困難になっている現状を踏まえ、また、「大学英語入門」と「英会話」を共に1年を通して4技能バランス良く学ぶことのほうが、学生にとって教育効果は大きいことから、対応策として、現在実施している週2回授業（2単位）を週1回授業（1単位）、前後期で2単位履修させる方策を議論した。これは、令和3年度の実施に向けたものであり、これまでの1学期大学英語入門／2学期英会話、あるいは、1学期英会話／2学期大学英語入門という従来の方法から、1週間に「大学英語入門 I (II)」と「英会話 I(II)」へと変更する案である。

2. 自己点検評価活動

「大学英語入門」の公正なる成績評価に向けて改善を検討した。具体的には、「公正な成績評価の実施に向けて」において示された「優以上の成績を修める学生の比率」は、「半分以下を標準とする」という評価の目安を基準とすることを踏まえ、令和元年度第1学期の成績評価を分析し、英語、ドイツ語、中国語の担当責任者間で結果を共有したうえで、対応をした。

3. その他

2019 度から、「大学英語入門」は GPA 等の問題より、レベル分けクラスを廃止している。2020 年度も継続予定であるが、これについては検証が必要であると考えられる。

また、適切なレベルの授業提供により、英語力向上や動機が高まるのではないかとの意見を踏まえ、GPA の問題を解決した他大学の取り組みを参考に、今後検討していく必要がある。

9 キャリア形成支援科目分科会

キャリア形成支援科目分科会長 山口晴生(農林海洋科学部)

分野又は科目の教育目標

学生のキャリア形成支援に必要なプログラムを開発・提供する。

キャリア形成を支援するための科目の配置・実施等について、その他の分科会の状況を踏まえ、再度カリキュラム編成についての修正と改善を進めた。さらに、科目内で教育の質の保証と評価方法についての自己点検・評価を実施した。

1. カリキュラム編成

共通教育科目としての各講義の適性、またその内容についての検討を実施した。各科目の配置に至った経緯、実施に関わる講師の意思、ならびに学生の受講状況等を確認し、次年度の担当可能性について確認したところ、「進路決定支援演習—自分プレゼンテーション法—」については廃止が適切と判断された。

2. 自己点検評価活動

全学における成績評価基準に照らし合わせ、キャリア形成支援科目については「公正な成績評価の実施に向けて（申し合わせ）」から大きく逸脱する科目は無いと判断された。

3. FD 活動

広報誌「パイプライン」への寄稿を通じて、本分科会の位置づけならびに取り組み状況を委員間で共有した。他の分科会や大学全体での FD 実施に関連する情報については担当委員内での共有を図った。

10 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会長

矢野 宏光（教育学部）

《カリキュラム編成について》

1. カリキュラム編成の経過

- 5月～10月 令和2年度のカリキュラム編成の検討
(特に退職教員不補充に対する妥当なノルマの検討)
- 11月 令和2年度の授業担当コマ数（ノルマ）の決定
- 11月～ カリキュラム編成作業
- 11月14日 令和2年度授業題目表（スポーツ・健康・生命・医療）提出

2. 令和2年度カリキュラム編成

令和2年度カリキュラム編成に当たっては、教育学部保健体育教員が、平成31年度から退職不補充となっているため、スポーツ・健康に課せられたノルマを退職不補充に相応して減じること、また教育学部以外にもスポーツ・健康の授業を担当できる人材を活用することを教育学部から要望した。

共通教育・カリキュラム等編成部会では種々論議した結果、①スポーツ科学講義・実技の履修希望者に対応できる授業数の確保、②教育学部の授業担当基本コマ数（44コマ）は分野間のコマ数を調整によりノルマを果たすことを条件に1コマを減じることが了承された。

他方、教育の質を担保するために、1学期・2学期を通して1コマずつのスポーツ科学実技を担当する非常勤講師を雇用することを決定した。

退職教員の不補充は、共通教育授業担当体制にも影響し、共通教育だけでは解決できない問題であるので、教員確保や共通教育授業実施体制の状況については、全学的問題としてとらえ対応するよう働きかける必要がある。

3. 令和元年度の変更点

- 1) 令和2年度よりスポーツ科学実技1コマ減（10から9）
- 2) 令和2年度よりスポーツ科学実技を担当する非常勤講師の雇用を決定（1学期・2学期1コマずつ増）

《FD 活動について》

スポーツ・健康分科会の FD 活動は、運動やスポーツを基にした健康づくりの在り方について検討すべく、生命医療分科会と合同で実施した。FD の内容は教員による授業参観と担当教員間の意見交換、効果的な体育実技の方法論と近年の体育実技科目受講者の傾向をテーマとした意見交換であった。

1. 授業参観

1) 対象授業は「ミックススポーツ」とした。

2) 「ミックススポーツ」主題ポイント

- 種々のスポーツの持つ技術体系や体力特性を理解し、練習やトレーニングを通して技術や体力を高めることを目指す。
- コミュニケーションをとり、互いに協力し合い、技術向上やゲームを楽しむことができる能力を身に着ける。
- 生涯に渡ってスポーツを実施する能力を身につける

3) 「ミックススポーツ」についての意見交換の概要

- 「ミックススポーツ」は平成 30 年度に新規開講となった科目であるが、4 日間×4 限に加えて、フィットネスやバスケットボール等の高強度運動を含み身体的にハードな内容であり、筋肉痛を訴える学生は多くみられたが、出席状況や履修の態度は良好であった。
- 20 名の定員としたが、授業の効率・学生の取り組みやすさなどから妥当な設定であることが確認された。
- 4 日間で 4 種目の実技を行うオムニバス形式であり、15 コマで開講される通常科目と比べて専門的に深く学ぶことができたかどうか、検討する必要があるだろう。
- 本授業選択に当たっては、日ごろ運動習慣があり、高い体力を有することが望ましいと考えられる。

2. 効果的な体育実技の方法論と近年の体育実技科目受講者の傾向

- 野田先生の担当するスポーツ科学講義は 2011 年度から、アクティブ・ラーニングの一種であるチーム基盤型学習法（TBL）で行ってきた。東京オリンピックに暗い影を落としているロシアのドーピング問題をグローバルな視点から読み解く一方、茶髪やピアスなど自分の身体への関わり方を学生同士で意見交換しながら考えさせる授業を展開している。
- 矢野が担当する「地域の中で剣道を学ぶ」は、地域と連携した地域関連科目であるが、その授業で実践している目的と内容を紹介し意見を交換した。
- 矢野が担当するスポーツ科学実技（剣道）において、日本人と留学生の割合がほぼ半々になりつつありグローバル化が進展している。この状況のなかでどのようにして授業を行っているのかを紹介し意見を交換した。

1. スポーツ科学講義

令和1年度1学期は、朝倉ならびに岡豊キャンパスで行われた講義各1コマにおいて、通常の学期末授業評価アンケートを実施した。しかし、これらについては、実施対象者が特定されるため報告書への記載は見送ることとする。

2. スポーツ科学実技

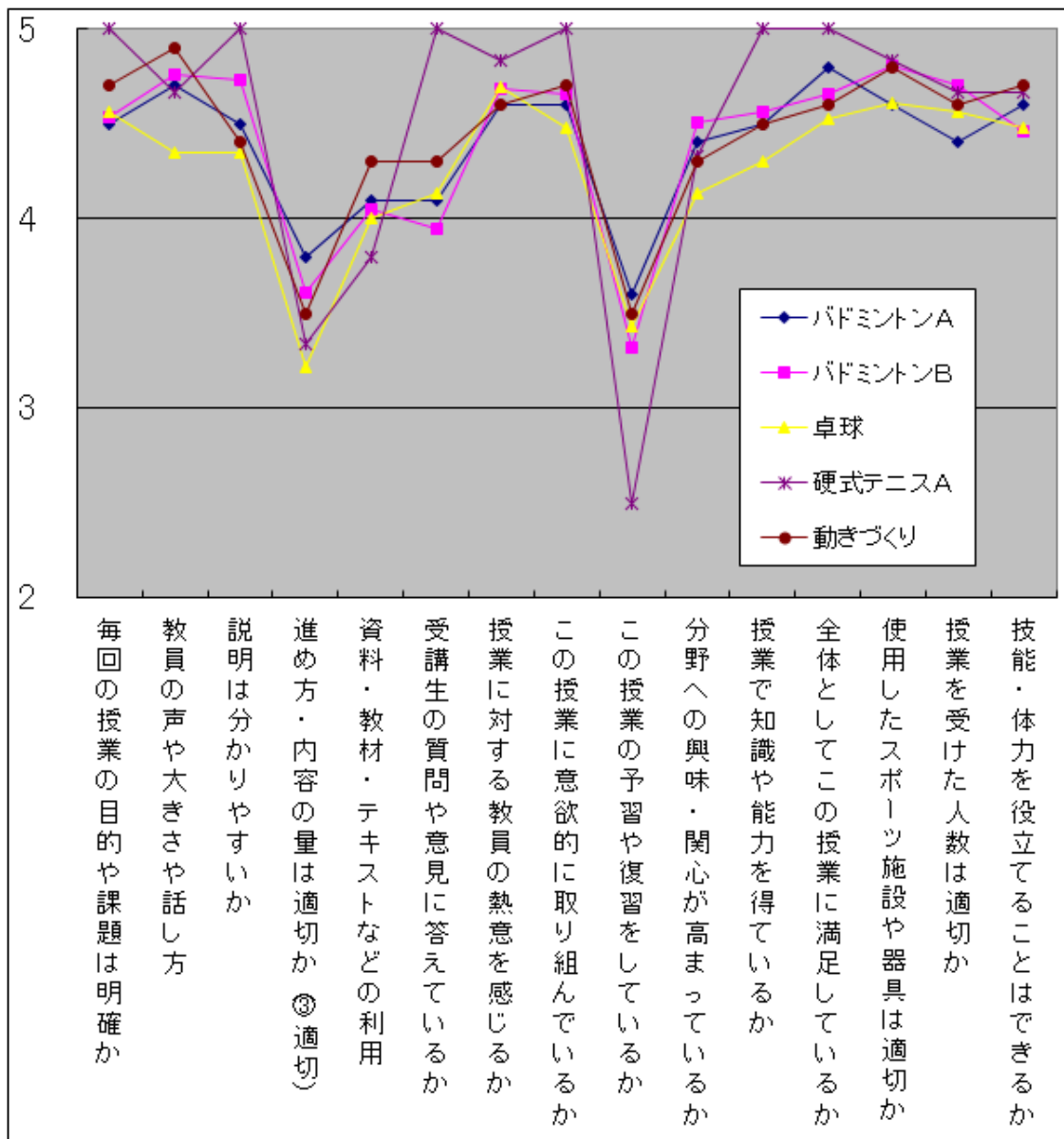


図1 令和元年度1学期授業評価アンケート集計結果

今年度は、受講者 10 名未満のフィットネスを除くすべての授業で授業評価アンケートを実施した。1 学期の種目は、フィットネス、バドミントンA, B, 卓球, 硬式テニス, ならびに岡豊キャンパス開講の動きづくりである。熱中症予防のため、屋外で実施せざるを得ない硬式テニスと体育館種目である動きづくりを入れ替えた。

対象となった 5 科目の学生満足度（設問 13）「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は、硬式テニスの 5.00 を筆頭に高い評価を維持し、バドミントンAが 4.80, B が 4.66, 卓球が 4.52, 動きづくりが 4.60 である。しかし、図 1 のように、（設問 6）配付資料や視聴覚教材の利用が適切かどうか、（設問 10）この授業の予復習をしているかどうか、に関しては低い評価がなされている。これら 2 問については、いずれの種目でもほぼ同様の傾向が認められ、授業方法に問題があるというよりは、スポーツ実技という科目特性に附帯する要因であると考えられる。全体の傾向としては、例年と同様であるが、1 学期の満足度平均が 4.65 から 4.66 へと僅かに改善傾向を示した。

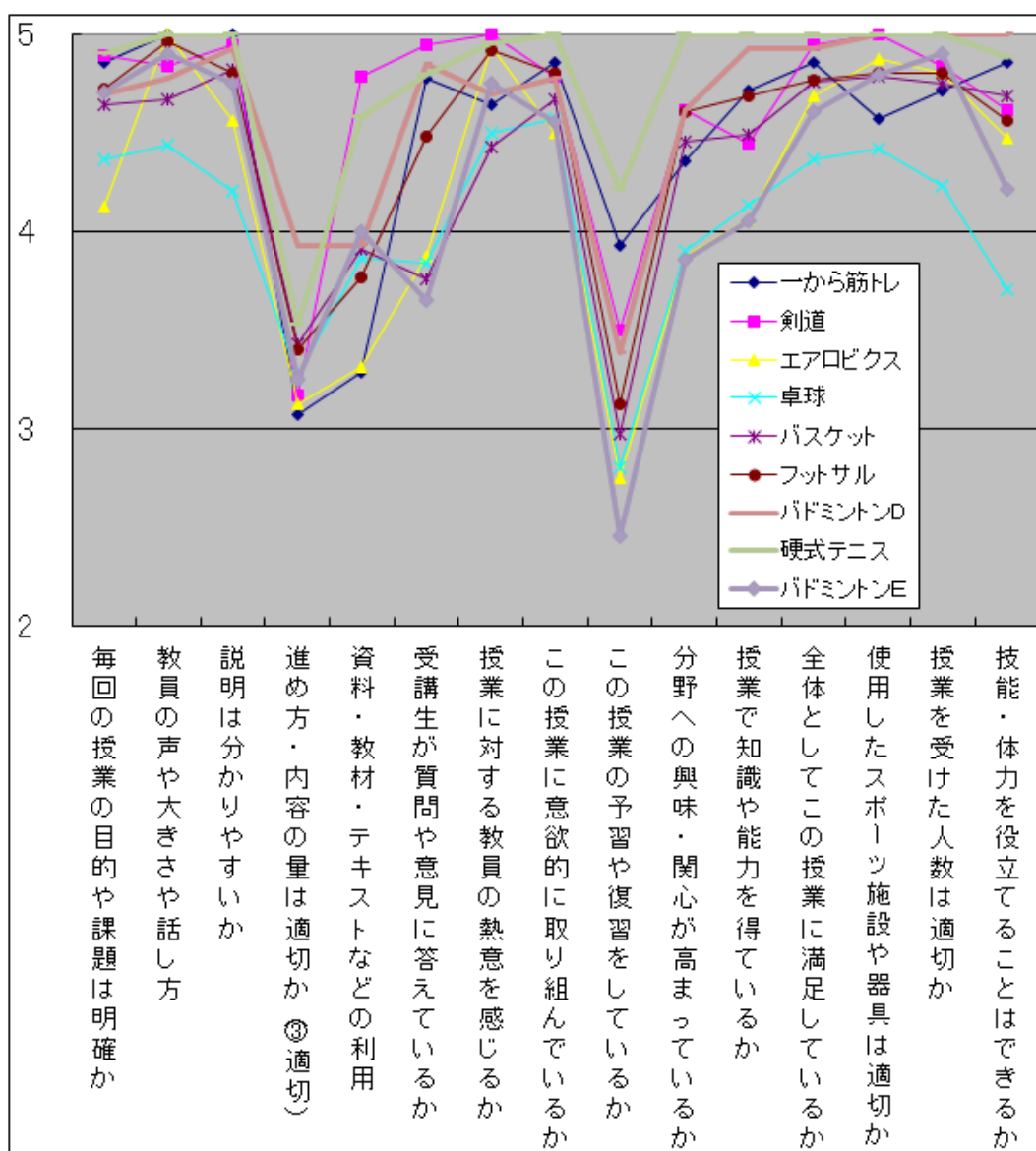


図 2 令和元年度 2 学期授業評価アンケート集計結果

2 学期のアンケート対象科目は、一から学べる筋力トレーニング、剣道、エアロビクス、卓球、バスケットボール、フットサル、バドミントンD、ならびに岡豊キャンパス開講の硬式テニスとバドミントンEである。対象となった9科目の学生満足度（設問 13）「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は1学期の平均 4.66 を上回る、4.77 という高い値となっている。卓球の評価が目立って低いのは、狭い卓球場に 32 名の履修希望が殺到し、ラケットの数も足りないまままで実施せざるを得ない状況が招いた結果と思われる。

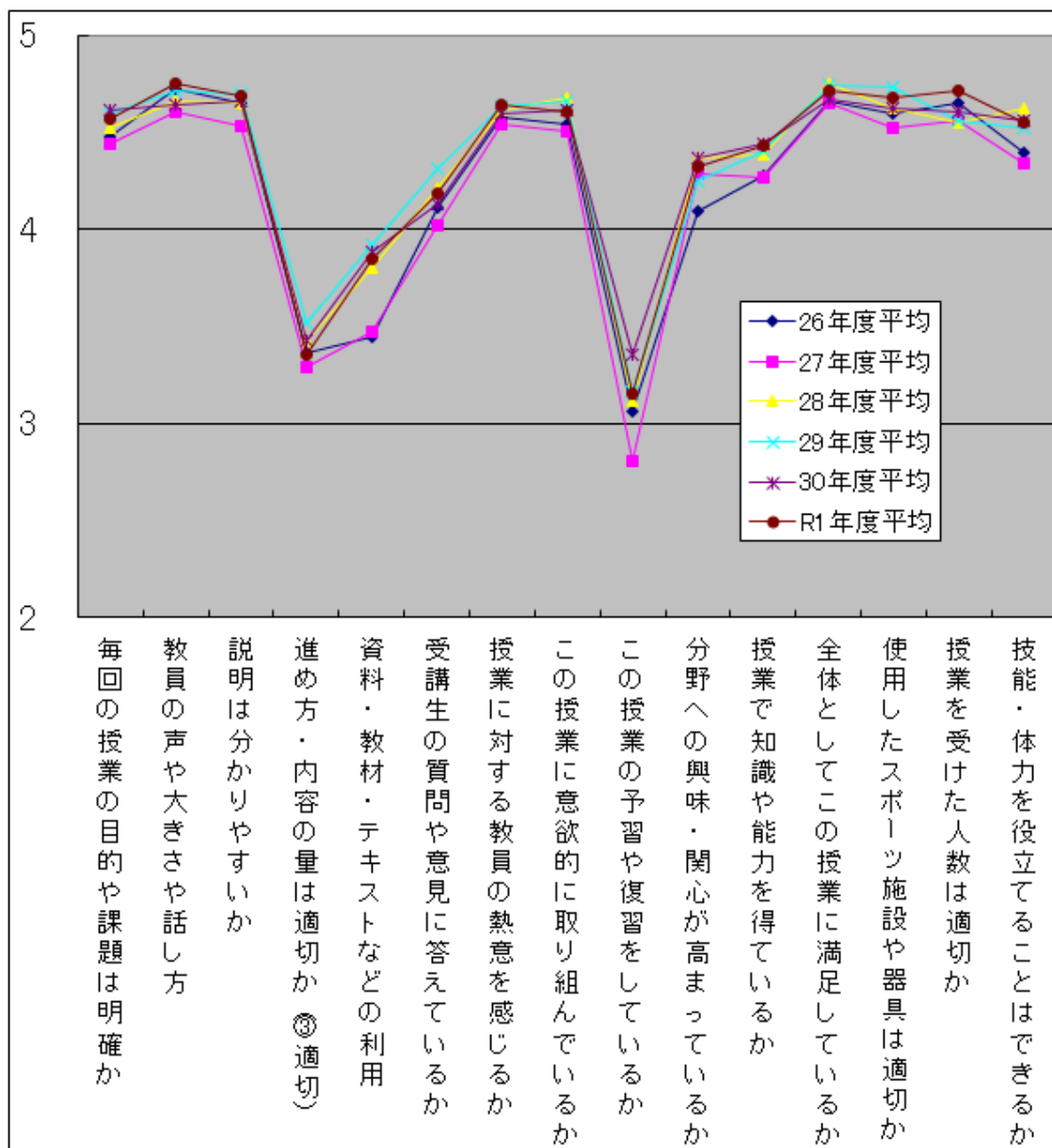


図3 平成26年度から令和元年度の学期末授業評価アンケート集計結果

図3は、平成26～令和元年度全14科目の授業評価アンケート平均値を比較したものである。図のように過去6年間の傾向は大きく変わっていない。設問10の予復習に関する質問項目に対する評価が低い。図1の分析と同様、実技という科目特性によるものと考えられる。26、27年度の「配布資料・視聴覚教材・テキストなどは適切に利用されていますか」との質問に対する回答が3.44、3.47と目立って低い。その後、3.80以上の数値に改善され、維持されている。これはアンケート結果をフィードバックした結果を受けて、各先生方が授業改善の努力

をされた成果と思われる。さらに「この分野への興味・関心が高まっているか」の項目で平成26年度は従来から大きくポイントが下がっていたが、27年度はやや持ち直し、28年度以降に改善した。

現在のところ、授業に対する教員の熱意、学生の意欲ともに高い評価を維持しながら推移しており、特別な支援や対策を講じる必要はないと考えられる。新たな科目を設けたり、開講学期を変更するなどの工夫により増加傾向を維持している。

スポーツ・健康部会では、スポーツ科学実技に関して昨年度までと同様、次のような独自の設問を設定した。

① 「授業で使用したスポーツ施設や用具は適切ですか」

学習意欲を喚起するためには重要な要素である。卓球の自由記載欄には「卓球のラケットを人数分用意するべきだと思う」、バドミントンには「ホワイトボード等を活用していたので、とても分かりやすかった」との記載があった。平均は4.68であり全体の傾向は変わらない(30年度：4.62, 29年度：4.74, 28年度：4.66, 27年度：4.75, 26年度：4.60)。

② 「一緒に授業を受けた人数は適切ですか」

授業の成果を上げるためには適正人数がある。多すぎると練習の回数や機会が制限され、技術の向上にとってはマイナスの要因にもなる。「卓球台の数が、人数にあってなく少ないので卓球台を増やすか、人数を減らすとより効率よく、卓球の技術を得られると思いました」との意見があった。卓球は1学期の履修人数が23名で、この評価項目は4.70なのに対して、2学期は32名を詰め込んだ結果4.23に低下した。ただし、平均は4.72であり全体の傾向は変わらない(30年度：4.61, 29年度：4.56, 28年度：4.55, 27年度：4.56, 26年度：4.65)。

③ 「獲得した知識や技能、体力を今後の生活に役立てることが出来ますか」

これについては2学期の卓球で3.70という低い評価を記録したが、全体としては4.55と、27年度の4.35からの改善を維持した。引き続き生涯にわたっての運動実践や体力づくりの必要性を理解させるように努力したい(30年度：4.55, 29年度：4.52, 28年度：4.53, 27年度：4.35, 26年度：4.39)。

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- 毎回、私達受講生の技能の達成度に合わせて授業内容を変更したり、重点的に練習する内容を決めてくださるので、苦手な部分に重きを置いて練習でき、克服していくことができました。また受講生各個人に対してもアドバイスを下さり、そのとおりにやってみると一気にサーブが入るようになっていたりしました。質問にも丁寧に答えてくださり、いつもアドバイスが的確で分かりやすかったです。硬式テニスをするのは中学1年以来で、やっていたという自信と、できるだろうかという不安もありましたが、初心者の気持ちで基礎から学び直せて、ゲームもできるようになったので、充実していました。今後もこの授業で得た技能を忘れず、硬式テニスに親しみたいです。先生と一対一でストローク練習ができ、本物の打球を体感できました。(テニス)
- 今回の授業を通して、改めてテニスの楽しさ、おもしろさを実感することができ、テニスをこれからも続けていこうと考えている。また、テニスを教えることの難しさと、テニス

の楽しさを仲間と分かち合うことが出来たので、とても嬉しく感じている。この授業を受けることができるとても良かったと感じている。(テニス)

- 授業人数は多すぎず、少なすぎず、先生にも質問しやすく、とてもわかりやすい授業でした。先生は毎回やることを明確にして下さり、練習も見ているだけでなく、一緒に参加して行ってくれたのでとてもうれしかったです。ゲームを何回もでき、あきることもなかったです。本当の楽しい授業でした。ありがとうございました。(テニス)
- 経験者と初心者が混ざっているのは仕方ないが、扱いに差を感じた。しかし、要望を聞いたり、学生を気づかう姿勢が多く見られ、環境は良かったと思う。(卓球)
- 担当教員の説明は大変分かりやすかったです。また、経験者も一定数いたので、上達も早くなって大変満足です。(卓球)
- 自由な感じの授業スタイルだったので、楽しめました。(バドミントン)
- バドミントンという日頃あまりやらない競技をしたことでスポーツの楽しさが分かりました。(バドミントン)
- 楽しかったです！ありがとうございました！（動きづくり）
- 筋トレを初めて行う学生でも取り組みやすい内容から、運動をしている人まで満足できる内容だと感じられた。(一から筋トレ)
- 完全な練習です The exercise is well designed. The teacher is very patient and nice. (エアロビクス)
- エアロビクスは名前をきいたことがあるけどよく分からない存在だったので身近に感じることが出来ました。もっといろいろな動きがやれたら良かったかなと思います。(エアロビクス)
- 大学に入学してから、運動、体を動かすことを積極的にしてこなかったので「これはマズいのでは…？」と感じ、受講しました。少しの時間だけど、活発に動いたり、ストレッチをすることで良いリフレッシュの機会ともなりました。ありがとうございました。(エアロビクス)
- 今まで、卓球に全然ふれてこなかったもので、こうしてしっかり卓球を学べる機会があつて良かった。まだまだ、未熟だがまた機会があればやりたい。(卓球)
- シングルやダブルスなど、さまざまな形でできてよかったです。先生のサポートも手あつくありがたかったです。ありがとうございました。(卓球)
- 卓球の楽しさに気づきました。運動不足なので、いい機会と思い、授業をとりました。卓球が上達したのでよかったです。(卓球)
- 2 学期ありがとうございました。私は運動が苦手な途中でおいていかれそうになりましたが先生や友達のおかげでなんとかできました！ありがとうございました。(剣道)
- 先生が細かく丁寧に教えてくださって分かりやすかった、ビデオなどもあって、分からない所をすぐ確認できた。とても楽しかった。(剣道)
- 先生とクラスメイトたちは本当にやさしいです。私にいろいろなことを教えてくれました。本当にありがとうございました。(剣道)
- 剣道の型を学ぶのは初めてでしたが、一から分かりやすく教えていただけて、非常に良い経験になりました。ここで学んだことを今後の人生にも役立てていきたいです。(剣道)
- 自分自身のためだけでなく、みんなのために考えてうごくということができるようになっ

てきたと思う。留学生に伝えることの難しさを改めて実感した。(剣道)

- 3 on 3 という新しいジャンルを学べてとても楽しかったです。(バスケットボール)
- とても楽しかったです。ありがとうございました。(バスケットボール)
- とても楽しかったです。また、お話をするご機会がございましたらよろしく願いいたします。(フットサル)
- 生徒間、先生、生徒の距離が近く、楽しく学ぶことができました。(フットサル)
- 一週間の楽しみにしていた授業でした。たくさんの試合形式ができ、他の人の技術を見ることができた、本当に楽しかったです。ありがとうございました。(バドミントン)
- 演習などで出席できない事もありましたが、優しく対応してくださり楽しく授業に参加できました。(バドミントン)
- テニスは初めてでしたが、ルールを学び、楽しくできました。体力が必要だと感じることができました。ありがとうございました。(テニス)
- 初めてテニスをしたけど楽しく学ぶことができました。(テニス)
- 毎回の授業で教員の熱意が伝わったので、とてもやる気をもって授業にのぞむことができました。また、ホワイトボード等を活用していたので、とても分かりやすかった。(バドミントン)
- バドたのしい。バド深い。(バドミントン)

(以上, 原文のまま)

1 1 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長

大塚 薫 (国際連携推進センター)

日本語・日本事情分科副会長 (自己点検活動担当)

佐野 由紀子 (人文社会科学部)

日本語・日本事情分科副会長 (FD活動担当)

林 翠芳 (国際連携推進センター)

<活動の概要>

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られた。今年度は科目によっては若干改善が見られたものの、その傾向が継続している。受講生からは「日本語」科目の授業が週2回の授業で2単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週1回の授業で2単位の取得が可能なため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅳは演習、日本事情Ⅰ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅳは週2回×16週で2単位、一方、日本事情Ⅰ～Ⅳは週1回×16週で2単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

また、従来日本語・日本事情科目は「外国人留学生及び学則第40条第2項(外国において相当の期間中等教育を受けた者)に該当する学生のための科目」として定められ、正規生のための科目として開講されていた。ここ数年は、特別聴講学生(短期交換留学生)の受講が増加し、2010年度以降は日本語科目においては非正規生の受講が受講生の8割以上を占めている。特別聴講学生は、母国で日本語・日本文化を専門として勉強している学生であり、高度な日本語力を有している。

日本語科目において履修学生に求められている日本語力は、日本語能力試験N1レベル(上級レベル)相当の能力であり、他の外国語で定めている基準より高く設定されている。実際に、履修している外国人留学生は、正規生及び特別聴講学生ともに本学で専門科目を日本人学生とともに学習している学生であり、上級レベルの日本語力を有しているため、日本現地で学習するという環境に加え、週1回の授業でも十分な学習効果が期待できる。さらに、週2回の受講の縛りをなくすことにより、外国人留学生の授業の選択の自由度が増え、より多くの教員の授業を受講することが可能になると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、外国人留学生が週1回でも日本語科目が取れるようになることは検討すべき今後の課題である。

1.カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、国際連携推進センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については前年度同様、日本語Ⅰ～Ⅳ、日本事情科目については日本事情Ⅰ～Ⅳを実施した。

また、2020年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。2020年度は日本語教育専門の国際連携推進センターの専任教員1名が2019年度末で退官するため、日本語科目の「日本語Ⅳ」は不開講となる。

2.自己点検活動&FD活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2019年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及びFD活動を連動させた活動を行ってきている。具体的な活動としては、日本語Ⅰ及び日本語Ⅳの授業内でピアレビュー活動を実施するとともに、日本語Ⅰ及び日本語Ⅲでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全8科目を6名の教員で担当して行っている上、今回ピアレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。また、アクティブラーニングに関するFD研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

さらに、新たな授業の開発として日本語・日本事情分科会で開講している科目内で体験学習を重視した日本文化の理解や文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育を展開した。2020年度以降も購入した書籍の内容を踏まえて、留学生の体験型学習や日本における就職時に必要なビジネス日本語教育を日本語・日本事情科目内で取り入れ、留学生のニーズに応えていきたいと考えている。